

目次

巻頭詩

それは黄金の昼下がり
気ままにただようぼくら
オールは二本ともあぶなげに
小さな腕で漕がれ
小さな手がぼくらのただよいを導こうと
かっこうだけ申し訳につけて

ああ残酷な三人！こんな時間に
こんな夢見る天気のもとで
どんな小さな羽さえもそよがぬ
弱い息のお話をせがむとは！
でもこの哀れな声一つ
三つあわせた舌に逆らえましょうか？

居丈だかなプリマがまずは唱える
その宣告は「おはじめなさい」
すこし優しげに二番手の希望
「でたらめをいれること」
そして三番手が語りをさえぎること
一分に一度以上ではないにせよ

すぐに、とつぜんの沈黙が勝り

想像で彼女らが追いかける
夢の子が奔放で新しい謎の地を
動き回るのを追って
鳥や獣と親しく語る——
そしてそれを半ば真に受け

そしてやがて、お話が渇えると
想像の井戸も枯れ
そして疲れた語り手が
肩の荷をおろそうとすれば
「つづきはこんど——」「**いまが**こんどよ！」
と声たちがうれしそうにさけぶ。

かくして不思議の国のお話がそだち
ゆっくり、そして一つ一つ
その風変わりなできごとがうちだされ——
そして今やお話は終わり
そしてみんなでおうちへと向かう
楽しい船乗りたちが夕日の下で

アリス！　子どもじみたおとぎ話をとって
やさしい手でもって子供時代の
夢のつどう地に横たえておくれ
記憶のなぞめいた輪の中
彼方の地でつみ取られた
巡礼たちのしおれた花輪のように

目次にもどる

---

1. うさぎの穴をまっさかさま

アリスは川辺でおねえさんのよこにすわって、なんにもすることがないのでとても退屈(たいくつ)しはじめていました。一、二回はおねえさんの読んでいる本をのぞいてみたけれど、そこには絵も会話もないのです。「絵や会話のない本なんて、なんの役にもたたないじゃないの」とアリスは思いました。

そこでアリスは、頭のなかで、ひなぎくのくさりをつくったら楽しいだろうけれど、起きあがってひなぎくをつむのもめんどくさいし、どうしようかと考えていました（といっても、昼間で暑いし、とってもねむくて頭もまわらなかったので、これもたいへんだったのですが）。そこへいきなり、ピンクの目をした白うさぎが近くを走ってきたのです。



それだけなら、**そんなに**めずらしいことでもありませんでした。さらにアリスとしては、そのうさぎが「どうしよう！　どうしよう！　ちこくしちゃうぞ！」とつぶやくのを聞いたときも、それが**そんなに**へんてこだとは思いませんでした（あとから考えてみたら、これも不思議に思うべきだったのですけれど、でもこのときには、それがごく自然なことに思えたのです）。でもそのうさぎがほんとうに、**チョッキのポケットから懐中時計(かいちゅうどけい)をとりだして**それをながめ、そしてまたあわててかけだしたとき、アリスもとびあがりました。というのも、チョッキのポケットなんかがあるうさぎはこれまで見たことがないし、そこからとりだす時計をもっているうさぎなんかも見たことないぞ、というのに急に気がついたからです。そこで、興味(きょうみ)しんしんになったアリスは、うさぎのあとを追っかけて野原をよこぎって、それがしげみの下の、おっきなうさぎの穴にとびこむのを、ぎりぎりのところで見つけました。

次の瞬間(瞬間)に、アリスもそのあとを追っかけてとびこみました。いったいぜんたいどうやってそこから出ようか、なんてことはちっとも考えなかったのです。

うさぎの穴は、しばらくはトンネルみたいにまっすぐつづいて、それからいきなりズドンと下におりていました。それがすごくいきなりで、アリスがとまろうとか思うひまもあればこそ、気がつくとなにやら深い井戸みたいなところを落っこちているところでした。

井戸がとっても深かったのか、それともアリスの落ちかたがゆっくりだったのかもしれません。だってアリスは落ちながら、まわりを見まわして、これからどうなっちゃうんだろうと考えるだけの時間がたっぷりあったからです。まずは下をながめて、どこに向かおうとしているのかを見きわめようとしました。でも暗すぎてなにも見えません。それから井戸の横のかべを見てみました。するとそこは、食器だなと本だなだらけでした。あちこちに、地図や絵がとめ金に引っかけてあります。アリスは通りすがりに、たなの一つからびんを手にとってみました。「マーマレード」というラベルがはってあります。が、空っぽだったので、とてもがっかりしてしまいました。下にいる人を殺したくはなかったので、びんを落とすのはいやでした。だから落ちる通りすがりに、なんとか別の食器だなにそれを置きました。

アリスは思いました。「でもこんなに落ちたあとなら、もう階段をころげ落ちるなんて、なんとも思わないわよ！　おうちじゃみんな、あたしがすごく勇敢（ゆうかん）だと思うでしょうね！　ええ、おうちのてっぺんから落っこちたって、もう一言も文句を言わないはずよ」（そりゃまあそのとおりでしょうけど）

下へ、下へ、もっと下へ。このまま**いつまでもずっと**落ちてくのでしょうか？ 「いままでもう何マイルくらい落ちたんだろ」とアリスは声に出して言いました。「そろそろ地球のまん中くらいにきたはず。えーと、そうなると四千マイルくらい落ちたことになる、のかな――」（つまりね、アリスは教室の授業で、こんなようなことをいくつか勉強していたわけ。で、このときはまわりにだれもいなかったから、もの知りなのをひけらかすには**あまり**つごうがよくはなかったんだけれど、でもこうして暗唱してみると、いいれんしゅうにはなったってこと）「――そうね、きょりはそんなもんね――でもそれだと、緯度(いど)や経度(けいど)はどこらへんにきたのかしら」（アリスは緯度(いど)や経度(けいど)ってのがなんなのか、まるっきり見当もついてなかったけれど、でも口にだすのにかっこいい、えらそうなことばだと思ったわけね）

しばらくして、アリスはまたはじめました。「このまま地球をドンッと**つきぬけて**落ちちゃうのかな！　頭を下にして歩く人たちのなかに出てきたら、すっごくおかしく見えるでしょうね！　それってたとえば日本とかだとあるぜん人、だっけ――」（ここではだれも聞いてる人が**いなくて**、アリスはむしろホッとしたんだ。だってどう考えても正しいことばにには聞こえなかったし）「――でも、国の名前はだれかにきかないと。あの、奥さま、ここってニュージーランドでしょうか、オーストラリアでしょうか？」（そしてアリスは、しゃべりながらおじぎをしようとした――宙を落っこちながら**会釈をする**なんて、考えてもごらんよ！　きみならそんなこと、できると思う？）「そしたらその方、そんなことを聞くなんて、あたしのことをすごくバカな女の子だと思っちゃうわ！　だめだめ、そんなこと聞いちゃ。どっかに書いてあるのが見つかるかもしれない」

下へ、下へ、もっと下へ。ほかにすることもなかったので、アリスはまたしゃべりだしました。「今夜、ダイナはあたしがいなくてさびしがるでしょうね！」（ダイナってのはねこ。）「お茶の時間に、みんなダイナのミルクのお皿を忘れないでくれるといいけど。かわいいダイナ！　おまえがいっしょにここへいてくれたらいいのに！　空中にはネズミはいないみたいだけれど、コウモリがつかまるかもしれないわよ、コウモリってすごくネズミみたいなんだから。でもねこってコウモリ食べるのかな？」そしてここで、アリスはいささか眠くなってきて、ちょっと夢うつつっぽい感じで、こうつぶやきつづけました。「ねこってコウモリ食べる？ねこ、コウモリ食べる？」そしてだんだん「ねこうもりって食べる？」とも。だって、どの質問にも答えられないので、どれをきいてもあんまりちがわなかったのですね。うつらうつらしてきて、ダイナと手に手をとって歩いている夢を見はじめました。そしてその中で、とても真剣にこうきいています。「さあダイナ、正直におっしゃい。おまえ、コウモリ食べたことあるの？」とそのときいきなり、ズシン！ズシン！アリスは小枝と枯れ葉の山のてっぺんにぶつかって、落ちるのはもうそれっきり。

けがはぜんぜんなくて、すぐにとび起きました。見上げても、頭上はずっとまっ暗。目の前にはまた長い通路があって、まだ白うさぎがその通路をあわてて走っていくのが見えました。これは一刻もむだにできません。アリスはびゅーんと風のようにかけだして、ちょうどうさぎがかどを曲がりしなに「やれ耳やらヒゲやら、こんなにおそくなっちゃって！」と言うのが聞こえました。そのかどをアリスが曲がったときには、かなり追いついていました。が、うさぎがどこにも見あたりません。そこは長くて天井のひくいろうかで、屋根からランプが一列にぶら下がって明るくなっていました。

そのろうかはとびらだらけでしたが、どれも鍵がかかっています。アリスは、ろうかの片側をずっとたどって、それからずっともどってきて、とびらをぜんぶためしてみました。どれも開かないので、アリスはろうかのまん中をしょんぼり歩いて、いったいどうやってここから出ましょうか、と思案するのでした。



いきなり、小さな三本足のテーブルにでくわしました。ぜんぶかたいガラスでできています。そこには小さな金色の鍵がのっているだけで、アリスがまっ先に思ったのは、これはろうかのとびらのどれかに合うんじゃないかな、ということでした。でもざんねん！　鍵穴が大きすぎたり、それとも鍵が小さすぎたり。どっちにしても、とびらはどれも開きません。でも、二回目にぐるっとまわってみたところ、さっきは気がつかなかったひくいカーテンがみつかりました。そしてそのむこうに、高さ40センチくらいの小さなとびらがあります。さっきの小さな金色の鍵を、鍵穴に入れてためしてみると、うれしいことにぴったりじゃないですか！

あけてみると、小さな通路になっていました。ネズミの穴くらいの大きさしかありません。ひざをついてのぞいてみると、それは見たこともないようなきれいなお庭につづいています。こんな暗いろうかを出て、あのまばゆい花だんやつめたいふん水の間を歩きたいなぁ、とアリスは心から思いました。でも、その戸口には、頭さえとおらないのです。「それに頭はとおったにしても、かたがないとあんまり使いものにならないわ」とかわいそうなアリスは考えました。「ああ、望遠鏡みたいにちぢまれたらな！　できると思うんだ、やりかたさえわかれば」というのも、近ごろいろいろへんてこりんなことが起こりすぎたので、アリスとしては、ほんとうにできないことなんて、じつはほとんどないんだと思いはじめていたのです。

その小さなとびらのところで待っていてもしかたないので、アリスはテーブルのところに戻りました。別の鍵がのってたりしないかな、となかば期待していたのです。あるいは少なくとも、望遠鏡みたいにちぢまるやりかたを書いた、規則の本でもないかな、と思いました。するとこんどは、小さなびんがのっかっていて（「これってさっきはぜったいになかったわよねえ」とアリスは言いました）、そしてびんの首のところには紙のふだがついていて、そこに「のんで」ということばが、おっきな字できれいに印刷されていました。



「のんで」は結構なのですけれど、でもかしこいアリスは、**そんなことを**あわててするような子ではありません。「いいえ、まずちゃんと見てみようっと。『毒』とか書いてないかどうか、たしかめるんだ」とアリス。というのも、お友だちに教わったかんたんな規則をまもらなかったばっかりに、やけどをしたり、野獣に食べられちゃったりした子供たちについて、すてきなお話をいくつか読んだことがあったからです。そういう規則というのは、たとえばまっ赤にやけた火かき棒をあんまり長くにぎっているとやけどをするよ、とか、指をナイフで**とぉっても**ふかく切っちゃったら、たぶん血が出てくるよ、とかですね。そして『毒』と書いてあるびんの中身をたくさんのんだら、たぶんまちがいなく、いずれ困ったことになるよ、というのも、アリスはぜったいにわすれなかったのでした。

でも、びんには「毒」とは書いて**ありませんでした**。そこでアリスは、ためしに味見をしました。そしてそれがとってもおいしかったので(どんな味かというと、チェリータルトと、カスタードと、パイナップルと、しちめんちょうローストと、トフィーと、熱いバターつきトーストをまぜたような味ね)、すぐにそれをのみほしてしまいました。

*　　*　　*　　*　　*

*　　*　　*　　*

*　　*　　*　　*　　*

「へんなの、へーんなの！」とアリス。「あたし、望遠鏡みたいにちぢまっちゃってるのね」

そしてたしかにそのとおり。アリスはいまや、身のたけたったの25センチ。これであの小さなとびらをとおって、あのきれいなお庭にいくのにちょうどいい大きさになったと思って、アリスは顔をかがやかせました。でもまず、もう何分かまってみて、もっとちぢんじゃわないかどうかたしかめました。これ

はちょっと心配なところでした。「だってあたしがロウソクみたいに、ぜんぶ消えちゃっておしまいになるかもしれないでしょ」とアリスはつぶやきました。「そうなったらあたし、どうなっちゃうんだろ」そしてアリスは、ロウソクをふき消したあとで、ロウソクの炎がどんなようすかを想像してみようとしました。というのも、そんなものを見たおぼえがなかったからです。

しばらくして、それ以上なにもおきないのがわかって、アリスはすぐにお庭にいこうときめました。でもかわいそうなアリス、ざんねんでした！とびらのところにきてみると、あの小さな金色の鍵をわすれてきたのに気がついたのです。そしてテーブルのところに戻ってみると、ぜったいに手がとどきません。ガラスごしに、とてもはっきりと見えてはいます。アリスはがんばってテーブルの脚をよじのぼろうとしましたが、つるつるでだめです。そしてがんばったあげくにつかれきって、かわいそうなこの子は、すわって泣き出してしまいました。

「こら、そんなふうに泣いてちゃだめだぞ！」とアリスは、ちょっときびしく自分に言いきかせました。「いいわね、いますぐ泣きやみなさい！」アリスが自分にする忠告は、とてもりっぱなものが多いのです（そのとおりにすることはほとんどなかったんだけどね）。そしてときどきは、自分をきびしくしかりすぎて、涙が出てくるほどでした。いちどなんか、自分相手にやっていたクロケーの試合でいんちきをしたので、自分の耳をぶとうとしたくらい。というのも、このふうがわりな子は、一人で二役をやるのがとても好きだったからです。「でもいまじゃ、二役をやってみてもしょうがないわよね。だってあたしはもうほとんど残ってなくて、まともな人間一人にも足りないくらいなんだもの！」とかわいそうなアリスは考えました。

やがて、テーブルの下の小さなガラスのはこが、アリスの目にとまりました。あけてみると、中にはとってもちっちゃなケーキが入っていて、ほしぶどうで「たべて」ときれいに書いてあります。「食べちゃおうっと」とアリス。「これで大きくなれたら、鍵に手がとどくでしょ。小さくなるようなら、とびらの下からもぐれるな。だからどっちにしてもあのお庭には行けるわけよね。あたしはどっちだっていいわ！」

ちょっと食べてみて、アリスは心配そうに自分に言いました。「どっちかな？どっちかな？」そして頭のてっぺんに手をやって、自分がどっちにのびているかを確かめようとします。ところが同じ大きさのままだったので、アリスはとってもびっくりしました。そりゃたしかに、ふつうはケーキを食べるとそうなるのですが、アリスはへんてこりんなことを期待するのになれすぎちゃっていたもので、人生がふつうのやり方でつづくなんていうのは、すごくつまんなくてばかばかしく思えたのです。

そこでアリスはそのままつづけて、じきにケーキをたいらげてしまいました。

* * * * *

* * * *

* * * * *

目次にもどる

---

2. 涙の池



「チョーへん！」とアリスはさけびました（びっくりしすぎて、ちゃんとしたしゃべりかたを忘れちゃったんだね）。「こんどはこの世で一番おっきな望遠鏡みたいに、ぐんぐんのびてる！　足さん、さよなら！」（だって足を見おろしたら、もうほとんど見えなくなっていて、どんどん遠くなっているのでした）。「ああ、かわいそうな足さん、これからだれが、くつやストッキングをはかせてあげるんだろう。**あたしには**ぜったいにむりなのはたしかね！　すっごく遠くにいすぎてて、あなたたちのことにはかまってられないの。できるだけ自分でなんとかしてね：——でも、親切にしといてあげないと」とアリスは思いました。「そうしないと、あたしの行きたいほうに歩いてくれないかも！　そうねえ。クリスマスごとに、新しいブーツをあげようっと」

そしてそれをどうやろうか、アリスはほんとに計画をはじめました。「運送屋さんにおねがいしないと。でもすっごく変でしょうね、自分の足におくり物をおくるなんて！それにあて先もずいぶんとおかしなものになるな。

だんろのかなあみ付近
じゅうたん気付
アリスの右足閣下へ
（アリスの愛をこめて）

あらあらあたし、なんてばかげたことを言ってるんだろ！」

ちょうどそのとき、頭がろうかの天井にぶつかりました。もうそのとき、アリスは身長三メートルになっていたので、すぐに小さな金色の鍵を手にとって、お庭へのとびらへといそぎました。

かわいそうなアリス！　できることといったら、ねそべって片目でお庭をのぞくことだけでせいいっぱい。でも、とおりぬけるなんてまったく絶望的。アリスはまたすわって泣き出しました。

「はじを知りなさい」とアリスは言いました。「そんなおっきななりをして」（まあたしかにそのとおり）「いつまでも泣いてばかり。いますぐやめなさい、いいわね！」でもアリスは、それでもかまわず泣きつづけて涙を何リットルも流したので、まわりじゅうにおおきな池ができてしまいました。深さ10センチくらいで、ろうかの半ばまでつづいています。



しばらくすると、遠くからピタピタという小さな足音が聞こえたので、あわてて涙をふいて、なにがきているのかを見ようとしました。あのうさぎが、りっぱな服にきがえてもどってくるところで、片手には白い子ヤギ皮の手ぶくろ、そしてもう片方の手にはおっきなせんすを持っていました。とってもいそいで走っていて、こっちにきながらも「ああ、公爵夫人が、公爵夫人が！　待たせたりしたら、なさけようしゃなんか**ありゃしない**！」とつぶやいています。アリスのほうは、もうせっぱつまっていて、だれでもいいから助けてほしい気分。そこでうさぎが近くにきたときに、小さなおちついた声でこうきりだしました。「あの、おねがいですから——」うさぎは、うっひゃあととびあがって、子ヤギ皮の手ぶくろとせんすを落としてしまい、全速力（ぜんそくりょく）で暗闇（くらやみ）の中へとかけ去っていってしまいました。

アリスはせんすと手ぶくろをひろって、ろうかがとても暑かったので、せんすであおぎながらしゃべり続けました。「あらまあ、きょうはなにもかもふうがわり！　きのうは、ほんとにいつもどおりだったのに。あたし、夜のあいだに変わっちゃったのかしら。そうねえ。起きたときには、おんなじだったっけ？　なんだかちょっと変わった気分だったような気もするみたい。でも、おんなじじゃないんなら、

つぎの質問は、いまのあたしはいったいぜんたいだれ？　それがかんじんななぞだわ！」そしてアリスは、おないどしの子たちを思いうかべていって、そのなかのだれかにかわってしまったかどうかを考えてみました。

「エイダじゃないのは確かだわ。エイダのかみの毛は、とっても長い巻き毛になるけど、あたしのかみはぜんぜん巻き毛にならないもの。それとぜったいにメイベルじゃないはず。だってあたしはいろんなことを知ってるけど、メイベルときたら、まあ！　もうなんにも知らないでしょう！　それに、**あの子は**あの子だし、**あたしは**あたしだし、それに——あれ、わかんなくなってきちゃった！まえに知ってたことをちゃんと知ってるか、ためしてみよう。えーと、四五の十二で、四六の十三で、四七が——あれ、これじゃいつまでたっても二十にならないぞ！　でも、かけ算の九九はだいじじゃないわ。地理をためしてみよう。ロンドンはパリの首都で、パリはローマの首都で、ローマは——**ぜんぜん**ちがうな、ぜったい。じゃあメイベルになっちゃったのね！　『えらい小さな——』を暗唱してみよう」そしてアリスは、授業でするみたいにひざの上で手を組んで、暗唱をはじめましたが、声がしゃがれて変てこで、ことばもなんだか前とはちがっていました：——

*　*　*　*　*

「えらい小さなワニさん
ぴかぴかのしっぽをみがいて
金色のうろこひとつずつを
ナイルの水であらいます！」

「うれしそうににったりと
なんてきれいにツメをひろげて
小さな魚をよびいれます
やさしく笑うその大口で！」

*　*　*　*　*

「いまの、ぜったいにまちがってるはずだわ」とかわいそうなアリスは言って、目に涙をいっぱいにうかべてつづけました。「じゃあやっぱりメイベルなんだ、そしたらあのちっぽけなおうちにすんで、あそぶおもちゃもまるでなくて、ああ！それにお勉強しなきゃならないことが、ほんとに山ほど！　いやよ、決めた。もしあたしがメイベルなら、このままここにいるわ！　みんなが頭をつっこんで『いい子だからまたあがってらっしゃい！』なんて言ってもむだよ。こっちは見上げてこう言うの。『だったらあたしはだれ？　まずそれを教えてよ。それでもしその人になっていいなと思ったら、あがってくわ。そうでなければ、べつの人になれるまでここにいる』——でも、あーあ！」とアリスは、いきなり涙をながしてさけびました。「ホントにだれか、頭をつっこんでくれないかな！　もう一人ぼっちでここにいるのは、すっごくあきあきしちゃったんだから！」

こう言いながら手を見おろしてみると、おどろいたことにうさぎの小さな子ヤギ皮の手ぶくろが、手にはまってしまっていました。「どうしてこんなことができちゃったんだろう？」とアリスは思いました。「あたし、また小さくなってるんだ」立ち上がってテーブルのところへいって、それと比べてせたけをはかってみると、まあだいたいの見当ですが、いまや身長60センチくらいで、しかもぐんぐんちぢみつづけています。やがてその原因が、手にもったせんすなのに気がついて、あわててそれを落としました。あぶないところで、ちぢみきって消えてしまわずにすんだのです。

「いまのはまさにきき一発だったわ」アリスは、いきなり変わったせいでとてもおびえてはいましたが、まだ自分がそんざいしているのを見て、とてもうれしく思いました。「さあ、そしたらお庭ね！」と、あの小さなとびらをめざしてぜんそくりょくでかけもどりました。が、ざんねん！　小さなとびらはまたしまっていて、小さな金色の鍵は、さっきとかわらずガラスのテーブルのうえで、「しかもさっきよりもひどいことになってるじゃないの」とあわれな子は考えました。「だってこんなに小さくなったのははじめてよ、ぜったい！　まったくざんねんしごくと断言しちゃうわ！」



そしてこのせりふを口にしたとたんに足がすべって、つぎのしゅんかんには、ボチャン！　あごまで塩水につかっていたのです。最初に思ったのは、どういうわけか海に落ちたんだろう、ということでした。「そしてもしそうなら、列車で帰れるわね」と思いました。（アリスは生まれてから一回だけ海辺にいったことがあって、そこからひきだした結論として、イギリスの海岸ならどこへいっても海には海水浴装置（かいすいよくそうち）があり、子どもが木のシャベルで砂をほっていて、海の家がならんでいて、そのうしろには列車の駅があるもんだと思っていたんだな）。でも、すぐに気がついたのは、自分がいるのはさっき身長3メートルだったときに泣いた涙の池の中だ、ということでした。

訳者のせつめい：海水浴装置、というのは、むかしは水着になったところが見えるとイヤラシイとみんな思ってたから、タンクみたいなものに入って、それでそれごと海に入れてもらったんだって、そのタンクのこと。

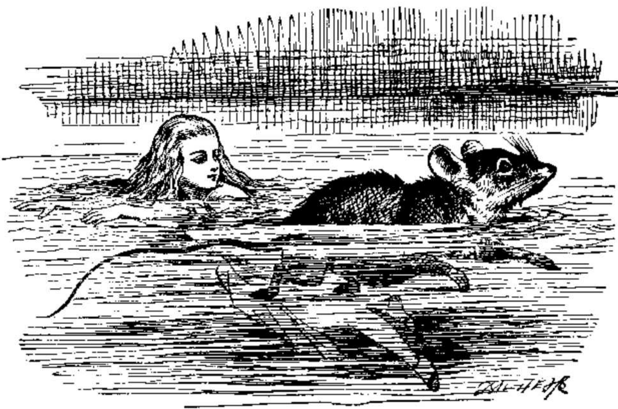
「あんなに泣かなきゃよかった！」とアリスはあちこち泳いでそこから出ようとしました。「おかげでいま、おしおきを受けているんだわ、自分の涙におぼれて！それってどう考えても、ずいぶんと変なことよね！　でもきょうは、なにもかも変だから」

ちょうどそのとき、すこしはなれたところで、なにかがばちゃばちゃしているのが聞こえました。そこでそっちのほうに泳いで、なんだか調べてみました。最初はそれがセイウチかカバにちがいないと思ったのですが、そこで自分がすごく小さくなっているのを思い出しました。そしてやがてそれが、自分と同じようにすべってこの池にはまってしまった、ただのネズミなのがわかりました。

「さてさて、ここでこのネズミにはなしかけたら、どうにかなるかしら？　ここではなんでもすっごくずれてるから、たぶんこのネズミもしゃべれたりするんじゃないかと思うんだ。まあどうせ、ためしてみる分にはいいでしょう」そう考えて、アリスは口を開きました。「おおネズミよ、この池からでるみちをごぞんじですか？　ここで泳いでて、とってもつかれちゃったんです、おおネズミよ！」（アリスは、ネズミにはなしかけるにはこれが正しいやりかたなんだろうと思ったわけだね。そんなことはこれまで

したことがなかったけれど、でもおにいさんのラテン語文法書で見かけたのを思いだしたんだ。「ネズミは——ネズミの——ネズミへ——ネズミを——ネズミよ！」）ネズミは、いささかさぐるような目つきでアリスをながめて、小さな目のかたほうでウィンクしたようでしたが、なにもいいません。

「もしかして、ことばがわかんないのかな？　征服王ウィリアムといっしょにきた、フランスねずみにちがいないわ」（歴史のことはいろいろ知っていても、アリスはいろんなことがどれだけむかしに起きたか、あまりちゃんとはわかっていなかったんだね）。そこでアリスはもういっかい口をひらきました。「*Ou est ma chatte?*（わたしのねこはどこですか？）」これはフランス語の教科書の、一番最初に出ている文だったのです。ねずみはいきなり水からとびだして、こわがってガタガタふるえだすようでした。「あらごめんなさい！」とアリスは、動物のきもちをきずつけたかな、とおもってすぐにさけびました。「あなたがねこぎらいなの、すっかりわすれてたから」



「ねこぎらい、とはね！」とネズミは、かん高くてきつい声でさけびました。「あんたがぼくなら、ねこが好きになるかね？」

「ええ、そりゃならないかもしれませんね」とアリスは、なだめるように言いました。「どうか怒らないでくださいな。でも、うちのねこのダイナをお目にかけられたらいいのに。あの子をひと目でも見れば、ねこも気に入るようになるんじゃないかと思うんです。とってもかわいくておとなしいんですよ」とアリスは、池のなかをゆったりと泳ぎながら、なかば自分に向かって話しつづけました。「それでだんろのところでのどをならしてると、手をなめたり顔を洗ったりして、すごくかわいいんです——それにあやすととってもやわらかくてすてきで——あと、ネズミをつかまえるのが名人級（めいじんきゅう）で——あらごめんなさい！」とアリスはまたさけびました。ネズミはこんどはからだじゅうの毛をさかだてていて、ああこんどはまちがいなく、本気で怒ってるな、とわかります。「もしよろしければ、わたしたちもう、あの子の話はよしましょうね」

「わたしたち、だと！」とネズミは、しっぽの先までガタガタいわせてさけびました。「ぼくが、そんな話をするとでも思うか！　うちの一族は、ずっとねこが**だいきらい**なんだ。いやらしい、低級（ていきゅう）で俗悪（ぞくあく）な生き物！　二度と名前もききたくない！」

「はい、ぜったいに！」とアリスは、あわてて話題を変えようとしました。「それなら、もしかすると——犬——はお好き——かしら？」ネズミは返事をしなかったので、アリスは熱心につづけました。「うちの近くには、すごくかわいい小さな犬がいるんですよ、もうお目にかけたいくらい！　小さくて目のきれいなテリアなんです、それも、すごく長くてクルクルした毛をしてて！　それでものを投げるととってくるし、ごはんのときにはおすわりしておねがいするし、いろんな芸もして——半分も思い出

せないんですけど――そしてそれを飼ってるのがお百姓さんで、その人の話だととってもちょうほうしてるんですって。百ポンドの値打ちがあるそうよ！　だってネズミをみんな殺すし、それに――あらどうしましょ！」とアリスはかなしそうな声でさけびました。「また怒らせちゃったみたい！」というのもネズミは、おもいっきりアリスから遠くへ泳ごうとしていて、おかげで池にはかなりの波がたっていました。

そこでアリスは、やさしくよびかけてみました。「ねえねずみさん、おねがいだからもどってらして。おきらいでしたら、ねこの話もイヌの話もしませんから！」ネズミはこれをきいて、くるりと向きをかえてゆっくりこっちに泳いできました。顔はかなりまっさおです（怒ったのね、とアリスは思いました）。そしてひくいふるえる声で言いました。「岸にたどりつこう、そうしたらぼくの話をしてあげよう。なぜねこや犬がきらいなのか、それでわかるだろう」

そしてちょうどそこを出るころあいでもありました。池には鳥や動物がどんどんはまってきて、すごくこんできたからです。アヒルにドードー、インコに子ワシ、そしてその他めずらしい生き物がいくつか。アリスがせんとうにたって、一同みんな、岸におよぎつきました。

目次にもどる

---

3. がくがくかけっことながいお話

岸辺にあつまった一同は、じつにへんてこな集団でした――鳥たちは羽をひきずり、動物たちはけがわがべったりはりついて、みんなびしょぬれでしずくをボタボタたらしていて、きげんもいごこちもわるかったのでした。

最初の問題はもちろん、どうやってからだをかわかそうか、ということでした。これについてみんな相談して、ものの数分でアリスは、その動物たちを生まれてからずっと知っていたみたいに、なかよくしゃべっていてもあたりまえに思えてきました。そしてインコとはかなりながい議論をしたあげく、インコはついにつんっと顔をそむけて、「ぼくのほうが歳上なんだから、ぼくのほうがちゃんとわかってるんだ」としか言わなくなってしまいました。そしてアリスのほうは、そのインコが何歳なのか知らないうちは、しょうちできなかったのですけれど、インコはぜったいに歳を教えようとはしなかったので、それ以上は話になりませんでした。

ついにネズミが、どうも一同のなかではえらい動物だったみたいで、こう宣言しました。「すわって、そしてぼくの話をききなさい！　**ぼくが**みんなをすぐに乾燥（かんそう）させてあげよう！」みんなすぐに、おっきなわになってすわり、ネズミを囲みました。アリスは心配そうにネズミを見ていました。はやく乾燥（かんそう）しないと、ぜったいにひどいかぜをひいちゃうな、と思ったからです。

「えへん」とネズミは、さもえらそうに言いました。「みんな用意はいいかな？　これはぼくの知るかぎりで、一番無味乾燥（むみかんそう）なしろものだ。はいみんな、おねがいだからおしずかに！『征服王ウィリアムの動機はローマ法王に支持を受け、じきにイギリス人たちを下したのであるがそのイギリス人たちは指導者を求めており、当時は王位簒奪と征服には慣れてしまっていた。マーシアとノーサンブリアの太守たるエドウィンとモルカールは――』

「うげっ」とインコが、みぶるいして言いました。

「なんですと？」とネズミが顔をしかめながらも、とってもれいぎ正しく言いました。「なにかおっしゃいました？」

「ぼくじゃないですよ！」とインコはあわてていいます。

「きみだと思ったんだが」とネズミ。「——先をつづけよう。『マーシアとノーサンブリアの太守たるエドウィンとモルカールはかれへの服従を宣言。さらにカンタベリーの愛国的枢機卿たるスティガンドも、より賢明なる策を見つけんとして——』」

「**なに**より?」とアヒル。

「**も**、より」とネズミは、ちょっときつい言い方でこたえました。「きみは『も』がわからんのかね」

「『も』くらい知ってるけどね」とアヒル。「でも**わたしが**『より』るときには、なによりかはわかるもんだ。カエルより、とかミミズより、とか。でもわかんないのは、その枢機卿は、**なにより**賢明な策を見つけようとしたわけ？」

ネズミはこの質問を無視して、いそいで先をつづけました。「『——より賢明なる策を見つけんとしてエドガー・アセリングとともにウィリアムに面会に赴き彼に王座を与えたのであった。ウィリアムの行いは当初は穏健だった。しかしその配下のノルマン人たちの傲慢ぶりは——』感想（かんそう）はどうだね、お嬢さん？」とネズミは、しゃべりかけでアリスに向かって言いました。

「びしょぬれのまんま」とアリスは、ゆううつな声で言いました。「ぜんぜん乾燥してくれないみたい」

「かくなるうえは」とドードーがたちあがって、おもおもしく述べました。「審議の一時中断動議を提出するものであります、しかる後に一層活力的なる対処法を遡及的速やかに採択すべく——」

「日本語しゃべれぇ！」と子ワシがいいました。「そんなむずかしいことば、半分もわからんぞぅ、それにもっというと、どうせあんただってわかってないんだろう！」そして子ワシは顔をかがめて、こっそりと笑いました。ほかの鳥たちは、きこえよがしにくすくす笑いをしています。

ドードーは、むっとして言いました。「なにを言いたいかというと、からだをかわかすには、がくがくかけっこが一番だってことだよ」

「がくがくかけっこって、**いったい**なんですか？」とアリス。べつにしりたいとも思わなかったのですが、ドードーがそこで口をとめて、**だれかが**口をはさむべきだと思ってるみたいだったし、ほかにだれもききたそうじゃなかったのです。

ドードーは言いました「おやおや、一番いい説明は、じっさいにやってみることだよ」（冬の日なんかには、きみたちもやってみるといいぞ。だからドードーのやりかたを説明しておこうか）

まずドードーは、なんとなく丸いかんじのかけっこのコースをつくりました（「せいかくなかたちはどうでもいいんだよ」だそうです）。それから一同みんな、そのコースのあちこちでいちにつきます。そしてだれも「よーい、どん！」といわないのに、みんなすきなときに走りだして、勝手なときに止まったので、いつかけっこがおわったのかなかなかわかりませんでした。でも、みんな三〇分かそこら走って、かなりかわいてくると、ドードーがいきなりどなりました。「かけっこおわり！」するとみんなドー

ドーのまわりにむらがって、はあはあいいながら、ききました。「でも、だれが勝ったの？」

　この質問は、ドードーとしてもずいぶん考えこまないとこたえられませんでした。そこで、ドードーはながいこと、ひとさし指をおでこにあててすわりこみ（シェイクスピアの絵をみると、いつもこういうかっこうをしてるよね）、のこりはだまってまっています。とうとうドードーはいいました。「**みーんな**勝ったんだよ、だから**全員が**賞品をもらわなきゃ」

「でも、だれが賞品をくれるの？」かなりの声がいっせいにききました。

「そりゃ**この子に**決まってるだろう」とドードーは、アリスを指さしました。するとみんながアリスのまわりにむらがって、くちぐちにさけびます。「賞品！　賞品！」

　アリスはどうしたらいいかさっぱりわからず、困ってしまってポケットに手をいれると、キャンデーのはこがでてきました。（運よく塩水はそこまで入ってこなかったんだ）そしてそれを賞品としてわたしてまわりました。ちょうどみんなに一つずつありました。

「でもこの子だって、自分も賞品をもらわないと、ねえ」とネズミ。

「もちろんだ」ドードーは、とってもえらそうです。そして「ポケットにはほかになにかもっとるかね？」とアリスにいいました。

「ゆびぬき一つだけ」アリスはかなしそうにいいました。



「よこしなさい」とドードー。

するとみんな、またアリスのまわりにむらがって、するとドードーがおもおもしくそのゆびぬきを授与しました。「われら一同、このゆーびなゆびぬきをおうけとりいただきたく、心からおねがいするものである」そして、ドードーのこのみじかい演説が終わると、みんなかんせいをあげました。

アリスは、なにもかもずいぶんとばかばかしいな、とは思ったのですが、みんながとってもまじめなようすだったので、死んでもわらったりできませんでした。そして、なにを言っていいか思いつかなかったので、ちょっとおじぎをしただけで、なるべくまじめくさったようすで、ゆびぬきをうけとりました。

つぎに、みんながキャンデーを食べるばんです。これはかなりそうぞうしい混乱（こんらん）をひきおこしました。おおきな鳥は、キャンデーが小さくてあじわえないともんくを言うし、小さな鳥はのどにキャンデーをつまらせて、せなかをたたいてもらわなくてはなりませんでした。でも、それがやっとおわって、みんなは輪になってすわり、ネズミになにかもっと話をしてくれ、とせがみます。

「ご自分の話をしてくれるっておっしゃってましたよね」とアリス。「なぜ——『い』とか『ね』とかきらいなのかって」アリスはここのところはひそひそ声で言いました。またネズミが怒っちゃうんじゃないかと思ったからです。

「ぼくのは、ながくてかなしいお話なのです」とネズミは、アリスのほうをむいてため息をつきました。

「たしかに、なが一い尾話（おはなし）ですねえ」とアリスはネズミの尾っぽを見おろしました。「でも、どういうところがかなしいんですか」そして、ねずみがしゃべっているあいだも、それを考えてばかりいたので、アリスの頭のなかでは、お話はこんなかんじになりました。

「いえのなかで出く
わした犬がねずみに
いうことにゃ「ふた
りで裁判所にいこう、
おまえを訴追して
やるからさ。——
こいって、いやと
はいわせない、
ぜひともこれは
裁判だ：だって
けさはおれほん
となにもする
ことないから」
ねずみ犬にこ
たえて言う
には「だん
さん、陪審
も判事もい
ないそんな

裁判なぞ、
するだけ息
のむだです
がな」「お
れが判事で
おれが陪審」
とずるい老犬。
「おれが全
件さばき
つくし、
きさまに
死刑を
宣告し
てくれる。」

「ちゃんときいてないな！」とネズミは、きびしい調子でアリスに言いました。「なにを考えてる！」

「あらもうしわけありません」とアリスは、とってもれいぎ正しく言いました。「たしか、くねくねの五番目あたりまでおっしゃいましたっけ？」

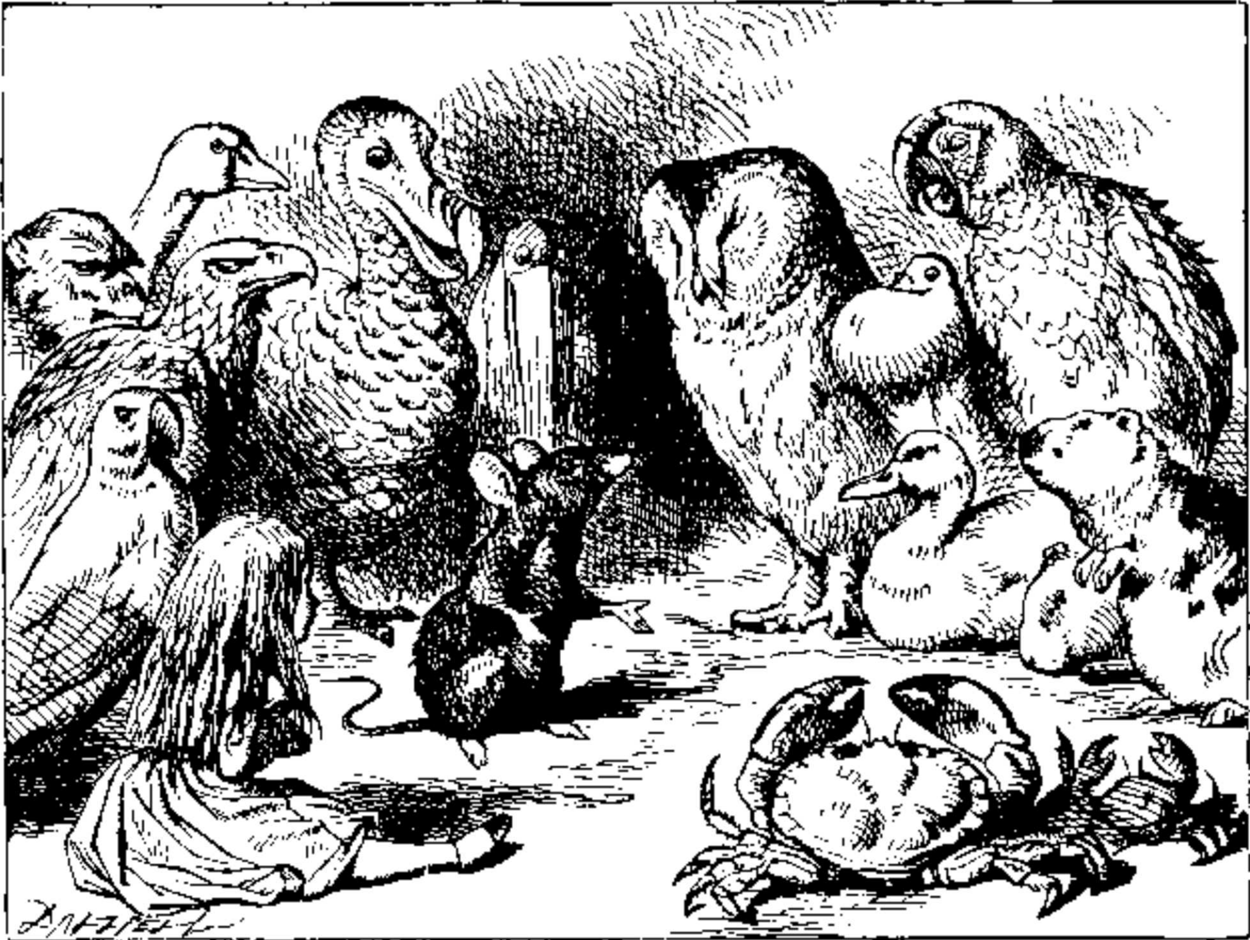
「そんなことは**ゆってないぞ**」とネズミは、怒ってきつい声でさけびます。

「**結（ゆ）ってない**！」アリスはいつでもおてつだいをしようとする子だったので、きょろきょろとあたりを見回しました。「じゃああたしがやりますから！」

「だれがそんなことするもんか」とネズミはたちあがって、むこうに歩きだしました。「ふざけたことばかりいって、ばかにしてる！」

「そんなつもりじゃなかったんです！」とかわいそうなアリスはうったえました。「でも、あなたもそんな、すぐに怒らなくても！」

ねずみはへんじがわりに、うなってみせただけでした。



「もどってきて、お話を最後まできかせて！」アリスはうしろからよびかけて、ほかのみんなもそれに声をあわせました。「うん、たのむよ！」でも、ネズミは怒ったように首をふるだけで、もっと足ばやにいってしまいます。

「いっちゃうなんて、まあなんでしょうねえ！」ねずみのすがたが、完全に見えなくなるとすぐ、インコがためいきをつきました。おばあちゃんガニが、ここぞとばかりにむすめにお説教です。「ほらごらん、いい子ですからね、**あなたは**ぜったいカッカしちゃだめよ！」すると若いカニが、ちょっときつくこたえます。「うっさいわね、母さん。母さんにかかったら、しんぼうづよいカキでも頭にくるわよ！」

「ダイナがいたらいいのになあ、ぜったい」とアリスは、だれに言うともなく、声に出していいました。「そしたらすぐにつれてきてくれるのに」

「そしてあえておたずねしてよろしければ、そのダイナとはどなたですかな？」とインコ。

アリスはうれしそうにこたえました。自分のペットの話は、どんなときでもしたくてたまらなかったからです。「ダイナは、うちのねこなの。それで、ねずみとりのうでまえは、思いもよらないくらいにすごいんですよ！　それと、小鳥をねらったときなんか、お見せしたいくらい！　小鳥なんて、見たしゅんかんにたべちゃうんです！」

この話で、一同は目に見えていろめきたちました。すぐにあわててそこをはなれる鳥もいます。おとしよりのカササギは、しんちょうにみづくろいをはじめてこう言います。「そろそろ家にかえりませんとねえ。夜風がどうも、のどにきついもんでして」そしてカナリアがふるえる声で、子どもたちによびかけます。「ほらみんな、いらっしゃい！　みんなとっくにおねむの時間よ！」なんだかんだと口実を

つけて、みんなどこかへいってしまい、やがてアリス一人がのこされてしまいました。

「ダイナのこと、いわなきゃよかった！」とアリスはゆううつにつぶやきました。「ここらだと、だれもあの子がすきじゃないみたい。ぜったいに世界で一番いいねこなのに！　ああかわいいダイナ、もう二度とおまえに会えないんじゃないかしら」そしてここで、かわいそうなアリスはまた泣き出しました。とってもさびしくて、おちこんでいたからです。でもちょっとしたら、遠くのほうからピタピタいう小さな足音がきこえてきました。アリスはよろこんで顔をあげました。ネズミの気がかわって、おなはしを最後までしようとしてもどってきたのかな、とすこし思ったのです。

目次にもどる

---

4. うさぎ、小さなビルをおくりこむ

それはあの白うさぎで、ゆっくりトコトコともどってきながら、困ったようにあたりを見まわしています。なにかなくしたみたいです。そして、こうつぶやいているのがきこえました。「公爵夫人が、公爵夫人が！　かわいい前足！　毛皮やらひげやら！　フェレットがフェレットであるくらい確実に、処刑されちゃうぞ！　まったくいったい**どこで**おとしたのかなあ？」アリスはすぐに、うさぎがさがしているのがせんすと白い子ヤギ皮の手ぶくろだとおもいついて、親切な子らしく自分もさがしはじめましたが、どこにも見あたりません――池での一泳ぎでなにもかもかわっちゃったみたいで、あのおっきなろうかは、ガラスのテーブルや小さなとびらともども、完全に消えうせていました。

さがしまわっていると、すぐにうさぎがアリスに気がついて、怒った声でこうよびかけました。「おやメリーアン、おまえはいったい、こんなとこでなにしてる？　いますぐに家に走ってかえって、手ぶくろとせんすをとってこい！」アリスはとってもこわかったので、すぐにうさぎの指さすほうにかけだして、人ちがいです、と説明したりはしませんでした。

「女中とまちがえたのね」とはしりながらアリスは考えました。「あたしがだれだかわかったら、すごくおどろくだろうな！　でもせんすと手ぶくろをとってこないと――みつかれば、だけどね」こう言ったときに、きれいな小さいおうちにやってきました。そのとびらには、ぴかぴかのしんちゅう板がかかっていて「しろうさぎ」という名前がほってありました。ノックせずに中に入って、いそいで二かいへ急ぎました。そうしないとほんもののメリーアンに出くわして、せんすと手ぶくろを見つけるまでに家から追い出されるんじゃないかと、すごくこわかったのです。

「へんなの、うさぎのおつかいをしてるなんて！」とアリスはつぶやきました。「つぎはダイナにおつかいさせられるのかな！」そしてアリスは、そうなったら何がおきるか想像をはじめました。「『アリスおじょうさま！　すぐにいらして、おさんぽのしたくをなさい！』『すぐいく、保母さん！　でもネズミがにげださないようにみはってないと』でも、ダイナがそんなふうに人に命令しだしたら、おうちにいさせてもらえなくなると思うけど！」

このころには、きちんとした小さな部屋にたどりついていました。窓ぎわにテーブルがあって、そこに（思ったとおり）せんすと、小さな子ヤギ皮の手ぶくろが、二、三組おいてありました。せんすに手ぶくろを一組手にとって、部屋を出ようとしたちょうどそのとき、鏡の近くにたっている小さなびんが目にとまりました。こんどは「のんで」と書いてあるラベルはなかったのですが、それでもふたのコル

クをとって、くちびるにあてました。「なんでも食べたりのんだりすると、ぜったい**なーんか**おもしろいことがおきるんだな。だから、このびんがなにをするか、ためしてみようっと。もっと大きくしてくれるといいんだけど。こんなちっぽけでいるのは、もうすっかりあきちゃったもん」

　たしかにそうなりました。しかも思ったよりずっとはやく。びんの半分ものまないうちに、頭が天井におしつけられて、首がおれないようにするには、かがむしかありませんでした。アリスはすぐにびんをおいて、つぶやきます。「もうこのくらいでたくさん——もうこれいじょうは大きくならないといいけど——いまだってもう戸口から出られない——あんなにのまなきゃよかった！」

　ざんねん！　そんなこといってもいまさらおそい！　アリスはどんどん大きく、もっと大きくなっていって、やがて床にひざをつくしかありません。もう一分もすると、これでも場所がなくなってきて、片ひじをとびらにくっつけて、もう片うでは頭にまきつけて、よこになるみたいなかんじにしてみました。それでもまだ大きくなりつづけて、窓から片うでをだして、片足はえんとつにつっこみました。そしてこうつぶやきます。「もうこれで、なにがおきてもどうしようもないわ。いったい**どうなっちゃう**んだろう？」



　アリスとしては運のいいことに、小さなまほうのびんは、もうききめがぜんぶ出つくして、それ以上は大きくなりませんでした。それでも、とてもいごこちは悪かったし、この部屋から二度と出られるみこみも、ぜったいになさそうだったので、アリスがあまりうれしくなかったのもあたりまえですね。

　「おうちのほうがずっとよかったわ」かわいそうなアリスは考えました。「おっきくなったりちっちゃくなったりばっかしじゃなかったし、ネズミやうさぎにこきつかわれたりもしなかったし。あのうさぎの穴に入らなきゃよかったと思うほど——でも——でもね——ちょっとおもしろいわよね、こういう生き方って！　あたし、いったいどうしちゃったのかな、とか考えちゃうし！　おとぎばなしをよんだときに

は、そういうことはおこらないんだと思ったけど、いまはこうしてそのまん中にいるんだ！　あたしのことを本に書くべきよね、そうですとも！　だから大きくなったら、あたしが書こうっと――でも、いまもおっきくはなってるんだわ」とかなしそうにアリスはつけくわえました。「すくなくとも**ここでは**、これ以上大きくなるよゆうはないわね」

「でもそしたら、あたしはいまより**ぜんぜん**歳（とし）もとらないってこと？　それはある意味で、ほっとするわね――ぜったいにおばあちゃんにならないなんて――でもすると――いつもお勉強しなきゃいけないってこと？　**そんなの**やーよ！」

「ああ、アリスのおばかさん」とアリスは自分でへんじをしました。「ここでお勉強なんかできないでしょ。だって、あなた一人でもぎゅうぎゅうなのに、教科書のはいるとこなんか、ぜんぜんないわよ！」

そしてアリスはそのままつづけました。まずは片側になってしゃべり、それからその相手になってしゃべり、なんだかんだでかなり会話をつづけました。でも何分かして、外で声がしたので、やめてきき耳をたてました。

「メリーアン！　メリーアン！　いますぐ手ぶくろをもってこい！」と声がいいます。そしてぴたぴたと小さな足音が、階段できこえました。うさぎがさがしにきたな、とわかったので、アリスはがたがたふるえて、それで家もゆれましたが、そこで自分がいまはうさぎの千倍も大きくて、ぜんぜんこわがらなくていいんだ、というのを思いだしました。

すぐにうさぎが戸口にやってきて、それをあけようとしました。が、とびらは内がわにひらくようになっていて、アリスのひじがそれをしっかりおさえるかっこうになっていました。だもんで、やってもダメでした。アリスはうさぎがこうつぶやくのをききました。「じゃあまわりこんで、窓から入ってやる」

「**そうは**させないわよ」とアリスは思って、音のかんじでうさぎが窓のすぐ下まできたな、と思ったときに、いきなり手をひろげて宙をつかみました。なにもつかめませんでしたが、小さなひめいが聞こえて、たおれる音がして、そしてガラスのわれる音がして、だからたぶん、うさぎはキュウリの温室（おんしつ）か、なんかそんなものの上にたおれたのかも、とアリスは思いました。



　つぎに怒った声がします——うさぎのです——「パット！　パット！　どこだ？」するとアリスのきいたことのない声が「へいへいこっちですよ！　リンゴほりしてまっせ、せんせい！」

「リンゴほり、がきいてあきれる！」とうさぎは怒って言います。「こい！　**こっから**出るのてつだってくれ！」（もっとガラスのわれる音）

「さてパット、あの窓にいるのは、ありゃなんだね？」

「うでにきまってますがな、せんせい！」（でもはつおんは、「しぇんしぇえ」だったけど）

「うでだと、このばか。あんなでかいうでがあるか！　窓いっぱいほどもあるだろう！」

「そりゃそのとおりですけどね、せんせい、でもうでにはちがいありませんや」

「とにかく、あんなものがあそこにいちゃいかん。おまえいって、どかしてこい！」

　ここでみんな、ずっとだまってしまいました。そしてきこえるのは、ときどきひそひそ声だけ。「うんにゃ、いやですよぅせんせい、だんじて、だんじて！」「いわれたとおりにせんか、このおくびょうものめが！」そしてアリスはついにまた手をひろげて、もう一回宙をつかんでみました。こんどは、小さなひめいが**二つ**あがって、またガラスのわれる音がしました。「ここらへんって、キュウリの温室（おんしつ）だらけなのねぇ」とアリスは思いました。「さて、こんどはどうするつもりかしら？　窓からひっぱり出すつもりなら、**ほんとに**それでうまくいけばいいんだけど。だって**あたしだって**もうここにはいたくないんだもん！」

しばらくは、なにもきこえないまま、まっていました。やっと、小さな手おし車がたくさんガタガタいう音がきこえて、話しあっているたくさんの声がします。ききとれたことばはこんなふうです。「もいっこのはしごはどこだ？――え、おれはかたっぽもってきただけだよ／もいっこはビルだ――ビル！　ここにもってこいって、ぼうず！――ほれ、こっちのかどに立てるんだよ――バカ、まずゆわえんだって――そんだけじゃ半分しかとどかねえ――よーし！　それでなんとかなるっしょ／おい、なんかいったか――ほれビル、ロープのこっちのはしっこつかまえてくれ――屋根がもつかなあ――そこ、屋根石がゆるんでるから――ほーら落ちた！　ふせろ！」（おっきなガシャンという音）――「おい、いまのだれがやった？――ビルだと思うね――だれがえんとつから入る？――えー、おれはいやだよ！　**おまえ**やれって！――えー、おれやですぅ！――ビルにいかせましょう――おいビル！　おやぶんが、おまえにえんとつ入れって！」

「あらそう！　じゃあビルはえんとつから入ってこなきゃならないってわけ？　へえ、そうなんだ！」とアリスはつぶやきました。「まったく、みんななんでもビルにおしつけるのね。あたしなら、どうあってもビルの身にはなりたくないなあ。このだんろはたしかにせまいけどでも、ちょっとはけっとばせるんじゃないかなー！」

アリスがえんとつの足をできるだけ下までおろしてまっていると、小さな動物（どんな動物かはわかりませんでした）が、えんとつのすぐ上のところで、カサコソとうごくのがきこえました。そこでアリスはこう思いました。「これがビルね」そしてするどく一発けりを入れて、どうなるかまちかまえました。



最初にきこえたのは、みんながいっせいに合唱する声です。「ビルがあがったあがったぁ！」そし

てうさぎの声がそこでしました――「おい、キャッチしろ、しげみんとこのおまえ！」そしてしずかになって、それから口々に声がきこえます――「頭をもちあげろ――ブランデーだ――息をつまらせるな――どうだった、ぼうず！　なにがあった？　なにもかも話してみろ！」

　最後に、よわよわしい小さな、キイキイ声がきこえました（「あれがビルね」とアリスは思いました）「ええ、ぜんぜんわかんないんっすけど――いやもうけっこう、どうも。もうだいじょうぶっす――でもちょいと目がまわっちまって話どころじゃ――わかったのは、なんかがビックリばこみたいにせまってきて、それでおいら、ロケットみたいにビューン、でして！」

「いやはやあんた、まったくそのとおりだねえ」とみんな。

「これは家に火をつけるしかないぞ！」とうさぎの声がいいました。そこでアリスはおもいっきり声をはりあげました。「そんなことをしたら、ダイナをけしかけてやるから！」

　すぐに死んだみたいにしずかになったので、アリスは考えました。「つぎは**いったい**なにをする気かしら！　ちょっとでも頭があれば、屋根をはずすはずだけど」一分かそこらで、また一同は動きまわりはじめ、うさぎの声がきこえました。「手おし車いっぱいくらいでいいな、手はじめに」

「手おし車いっぱいの**なんなの**？」とアリスは思いました。でも、すぐにわかることになりました。というのも、つぎのしゅんかんに、小石が雨あられと窓からとびこんできて、いくつか顔にあたったのです。「やめさせてやるわ」とアリスはつぶやいて、どなりました。「あんたたち、二度とやったらしょうちしないわよ！」するとまた、死んだようにしずかになりました。

その小石が床にころがると、みんなケーキにかわっていったので、アリスはちょっとおどろきました。そしてすばらしいアイデアがひらめきました。「このケーキをひとつ食べれば、まちがいなく大きさがかわるはずよ。それでこれ以上はぜったいおっきくなれないから、かならず小さくなる、と思う」

　そこでケーキを一つのみこんでみると、すぐにちぢみだしたので、アリスはおおよろこびでした。とびらをとおれるくらい小さくなると、すぐに走ってそのおうちを出ました。外では、小さな動物や鳥たちがかなりたくさんまちかまえていました。かわいそうな小トカゲのビルが、そのまん中にいて、それを介抱（かいほう）しているモルモット二ひきの手で、びんからなにかをのませてもらっています。みんな、アリスがあらわれたとたんに、いっせいにかけよってきました。でもアリスはおもいっきり走って、やがて深い森にはいったのでひとまず安心。

「まずやんなきゃいけないのは、もとの大きさにもどることね」とアリスは、森のなかをさまよいながらつぶやきました。「そして二ばんめに、あのきれいなお庭へのいきかたを見つけることよ。それが一番いい計画だわ」

　たしかに、すばらしい計画なのはまちがいないですし、とっても単純明快（たんじゅんめいかい）です。ただし一つだけ困ったことに、どこから手をつけていいやら、さっぱり見当もつかなかったのです。そしてそうやって木の間を不安そうにのぞいていると、小さくてするどいほえ声がして、アリスはあわてて上を見ました。

きょだいなワンちゃんが、おっきなまるい目でこっちをみおろし、まえ足をかたっぽ、おずおずとさしのべて、アリスにさわろうとしています。「まあかわいそうに」とアリスは、なだめるような声で言うと、いっしょうけんめい口ぶえをふいてやろうとしました。でも、そのとき、そのワンちゃんがおなかをす

かせてたらどうしようとおもって、とてもこわかったのです。もしそうなら、どんなになだめても、たぶんすぐにアリスを食べちゃうはずでしょう。



自分でもなぜだかわからないまま、アリスは小さな棒っきれをひろって、それをワンちゃんのほうにさしだしました。するとワンちゃんは、四本足でぴょんととんで、うれしそうにほえると、棒っきれにかけよってきて、それにかまけてるふりをします。そこでアリスは、おっきなイバラの後ろにかくれて、おしつぶされないようにしました。反対側から出てきたとたんに、ワンちゃんはもう一回、棒っきれにとびついて、それをおさえようとして頭からゴロゴロころがってしまいました。そしてアリスは、これはまるでばしゃ馬とあそんでるみたいで、いつふみつぶされるかわからないわ、と思いながら、またいばらのむこう側に走っていきました。そしてワンちゃんは、何度か棒っきれにみじかくとっしんをくりかえします。前にはほんのちょっとだけすすんで、それからおもいっきりさがって、そのあいだずっとワンワンとほえていました。そしてとうとう、ずっとはなれたところですわりこみ、ベロをだらりとたらし、息をハアハアいわせて、おっきな目を半分とじています。

これは、にげだすぜっこうのチャンスだとおもったので、アリスはすぐにかけだして、かなりつかれて息がきれるまで、走りつづけました。ワンちゃんのほえる声は、もう遠くでかすかにきこえるだけでした。

「でも、すっごくかわいいワンちゃんだったなあ」とアリスは考えながら、キンポウゲにもたれてやすんで、はっぱで自分をあおぎました。「芸を教えたかったなあ――あたしさえちゃんとした大きさだったら！　あ、そうだった！　あたし、また大きくならないと！　わすれるとこだったわ。さーて――**どうすれば**いいのかな？　たぶんなんかしら、食べるかのむかすればいいんでしょうね。でもなに

を？　それが大問題だわ」

たしかにそれは大問題でした。なにを？　まわりをぐるっと見ても、花やはっぱは目に入りますが、いまのじょうたいで食べたりのんだりするのによさそうなものは、なんにも見あたりません。近くに、アリスと同じくらいのせたけのキノコがありました。アリスはその下をのぞいて、両側を見て、うら側も見てみたので、じゃあついでに、てっぺんになにがあるかも見てやろう、と思いつきました。

つま先立ちになって、キノコのふちから上をのぞくと、その目がおっきないもむしの目と、すぐにばっちりあってしまいました。そいつはキノコのてっぺんにうで組みをしてすわり、しずかにながーい水パイプをすっていて、アリスも、それ以外のなにごとも、ぜんぜんどうでもいい、というようすでした。

目次にもどる

---

5. いもむしの忠告



いもむしとアリスは、しばらくだまっておたがいを見つめていました。とうとういもむしが、口から水パイプをとって、めんどうくさそうな、ねむたい声で呼びかけてきました。

「**あんた**、だれ？」といもむしが言います。

これは会話の出だしとしては、あんまり気乗りするものじゃありません。アリスは、ちょっともじもじしながら答えました。「あ、あ、あの、あまりよくわかんないんです、いまのところ——少なくとも、けさ

起きたときには、自分がだれだったかはわかってたんですけど、でもそれからあたし、何回か変わったみたいで」

「そりゃいったいどういうことだね」といもむしはきびしい声で申します。「自分の言いたいことも言えんのか！」

アリスは言いました。「はい、自分の言いたいことが言えないんです。だってあたし、自分じゃないんですもん、ね？」

「『ね？』じゃない」といもむしが言います。

「これでもせいいっぱいの説明なんです」とアリスはとてもれいぎ正しくこたえました。「なぜって、自分でもわけがわからないし、一日でこんなに大きさがいろいろかわると、すごく頭がこんがらがるんです」

「がらないね」といもむし。

「まあ、あなたはそういうふうには感じてらっしゃらないかもしれないけれど、でもいずれサナギになって――だっていつかなるんですからね――それからチョウチョになったら、たぶんきみょうな気分になると思うんですけど。思いません？」

「ちっとも」といもむし。

「じゃあまあ、あなたの感じかたはちがうかもしれませんけれど、でもあたしとして言えるのは、**あたしには**すごくきみょうな感じだってことです」

「あんた、か！」といもむしはバカにしたように言いました。「**あんた**、だれ？」

これで話がふりだしにもどりました。アリスは、いもむしが**ずいぶんと**みじかい返事しかしないので、ちょっと頭にきました。そこでむねをはって、とてもおもおもしく言いました。「思うんですけれど、**あなたも**ご自分のことをまず話してくださらないと」

「どうして？」といもむし。

これまたなやましい質問です。そしてアリスはいい理由を考えつかなかったし、いもむしも**ずいぶんと**きげんがよくないようだったので、あっちにいくことにしました。

「もどっといで！」といもむしがうしろからよびかけました。「だいじな話があるんじゃ！」

これはどうも、なかなか期待できそうです。そこでアリスは向きをかえると、またもどってきました。

「カッカするな」といもむし。

「それだけ？」とアリスは、はらがたつのをひっしでおさえて言いました。

「いや」といもむし。

じゃあまちましょうか、とアリスは思いました。ほかにすることもなかったし、それにホントに聞くねう

ちのあることを言ってくれるかもしれないじゃないですか。何分か、いもむしはなにも言わずに水パイプをふかしているだけでしたが、とうとううで組みをといて、パイプを口からだすと言いました。
「で、自分が変わったと思うんだって？」

「ええ、どうもそうなんです。むかしみたいにいろんなことがおもいだせなくて——それに十分と同じ大きさでいられないんです！」

「おもいだせないって、**どんなこと？**」といもむし。

「ええ、『えらい小さなハチさん』を暗唱しようとしたんですけれど、ぜんぜんちがったものになっちゃったんです！」アリスはゆううつな声でこたえました。

「『**ウィリアム父さんお歳をめして**』を暗唱してみぃ」といもむし。

アリスはうでを組んで、暗唱をはじめました。

*　　*　　*　　*　　*



『ウィリアム父さんお歳をめして』とお若い人が言いました。
『かみもとっくにまっ白だ。
なのにがんこにさか立ちざんまい——
そんなお歳でだいじょうぶ？』

ウィリアム父さん、息子にこたえ、
『わかい頃にはさかだちすると、

脳みそはかいがこわかった。こわれる脳などないとわかったいまは、
なんどもなんどもやらいでか！』



『ウィリアム父さんお歳をめして』とお若い人、
『これはさっきも言ったけど。そして異様（いよう）なデブちんだ。
なのに戸口でばくてんを——
いったいどういうわけですかい？』

老人、グレーの巻き毛をゆする。
『わかい頃にはこの軟膏（なんこう）で
手足をきちんとととのえた。
一箱一シリングで買わんかね？』



『ウィリアム父さんお歳をめして』とお若い人、
『あごも弱ってあぶらみしかかめぬ
なのにガチョウを骨、くちばしまでペロリ——
いったいどうすりゃそんなこと？』

父さんが言うことにゃ
『わかい頃には法律まなび
すべてを女房と口論三昧
それであごに筋肉ついて、それが一生保ったのよ』



『ウィリアム父さんお歳をめして』とお若い人、
『目だって前より弱ったはずだ
なのに鼻のてっぺんにウナギをたてる——
いったいなぜにそんなに器用？』

『質問三つこたえたら、もうたくさん』と
お父さん。『なにを気取ってやがるんだ！
日がなそんなのきいてられっか！
失せろ、さもなきゃ階段からけり落とす！』

*　　　*　　　*　　　*　　　*

「いまのはまちがっとるなあ」といもむしは申しました。

「**完全には**正しくないです、やっぱり」とアリスは、ちぢこまって言いました。「ことばがところどころで変わっちゃってます」

「最初っから最後まで、まちがいどおしじゃ」といもむしは決めつけるように言って、また数分ほど沈黙（ちんもく）がつづきました。

まずいもむしが口をひらきました。

「どんな大きさになりたいね？」とそいつがたずねます。

「あ、大きさはべつにどうでもいいんです」とアリスはいそいでへんじをしました。「ただ、こんなにしょっちゅう大きさが変わるのがいやなだけなんです、ね？」

「『ね？』じゃない」といもむしが言います。

アリスはなにも言いませんでした。生まれてこのかた、こんなに茶々を入れられたのははじめてでした。だんだん頭にきはじめてるのがわかります。

「それでいまは満足なの？」といもむしが言いました。

「まあ、もしなんでしたら、**もうちょっと**大きくはなりたいです。身長8センチだと、ちょっとやりきれないんですもの」

「じつによろしい身長だぞ、それは！」といもむしは怒ったようにいいながら、まっすぐたちあがってみせました（ちょうど身長8センチでした）。

「でもあたしはなれてないんですもん！」とかわいそうなアリスは、あわれっぽくうったえました。そしてこう思いました。「まったくこの生き物たち、どうしてこうすぐに怒るんだろ！」

「いずれなれる」といもむしは、水パイプを口にもどして、またふかしはじめました。

アリスはこんどは、いもむしがまたしゃべる気になるまで、じっとがまんしてまっていました。一分かそこらすると、いもむしは水パイプを口からだして、一、二回あくびをすると、みぶるいしました。それからキノコをおりて、草のなかにはいこんでいってしまいました。そしてそのとき、あっさりこう言いました。「片側でせがのびるし、反対側でせがちぢむ」

「片側って、**なんの**？　反対側って、**なんの**？」とアリスは、頭のなかで考えました。

「キノコの」といもむしが、まるでアリスがいまの質問を声にだしたかのように言いました。そしてつぎのしゅんかん、見えなくなっていました。

アリスは、しばらく考えこんでキノコをながめていました。どっちがその両側になるのか、わからなかったのです。キノコは完全にまん丸で、アリスはこれがとてもむずかしい問題だな、と思いました。でもとうとう、おもいっきりキノコのまわりに両手をのばして、左右の手でそれぞれキノコのはしっこをむしりとりました。

「さて、これでどっちがどっちかな？」とアリスはつぶやき、右手のかけらをちょっとかじって、どうなるかためしてみました。つぎのしゅんかん、あごの下にすごい一げきをくらってしまいました。あごが足にぶつかったのです！

いきなり変わったので、アリスはえらくおびえましたが、すごいいきおいでちぢんでいたので、これはぼやぼやしてられない、と思いました。そこですぐに、もう片方をたべる作業にかかりました。なにせあごが足にぴったりおしつけられていて、ほとんど口があけられません。でもなんとかやりとげて、左手のかけらをなんとかのみこみました。

*　　*　　*　　*　　*

*　　*　　*　　*

* * * * *

「わーい、やっと頭が自由になった！」とアリスはうれしそうにいいましたが、それはいっしゅんでおどろきにかわりました。自分のかたがどこにも見つからないのです。見おろしても見えるのは、すさまじいながさの首で、それはまるではるか下のほうにある緑のはっぱの海から、ツルみたいにのびています。

「あのみどりのものは、**いったいぜんたい**なにかしら？　それとあたしのかたは**いったい**どこ？　それにかわいそうな手、どうして見えないのよ！」こう言いながらも、アリスは手を動かしていましたが、でもなにも変わりません。ずっと遠くのみどりのはっぱが、ちょっとガサガサするだけです。

手を頭のほうにもってくるのはぜつぼうてきだったので、頭のほうを手までおろそうとしてみました。するとうれしいことに、首はいろんな方向に、ヘビみたいにらくらくと曲がるじゃないですか。ちょうど首をゆうびにくねくねとうまく曲げて、はっぱの中にとびこもうとしました。そのはっぱは、実はさっきまでうろうろしていた森の木のてっぺんにすぎませんでした。するとそのとき、するどいシューっという音がして、アリスはあわてて顔をひっこめました。おっきなハトが顔にとびかかってきて、つばさでアリスをぼかすかなぐっています。

「ヘビめ！」とハトがさけびました。

「**だれが**ヘビよ！」とアリスは怒って言いました。「ほっといて！」

「やっぱりヘビじゃないか！」とハトはくりかえしましたが、こんどはちょっと元気がなくて、なんだか泣いてるみたいでした。「なにもかもためしてみたのに、こいつらどうしても気がすまないんだからね！」

「なんのお話だか、まるでさっぱり」とアリス。

「木の根っこもためして、川岸もためして、生けがきもためしてみたのに」とハトはアリスにおかまいなしにつづけます。「でもあのヘビどもときたら、いっこうにお気にめさない！」

アリスはますますわけがわからなくなりましたが、ハトが話し終えるまでは、なにをいってもむだだな、と思いました。

「たまごをかえすだけでもいいかげん、たいへんだってのに」とハト。「おまけによるもひるも、ヘビがこないか見張ってなきゃなんない！　この三週間、もうほんのちょっともねてないんだよ！」

「たいへんですねえ、おきのどく」アリスは、だんだんハトがなにをいいたいのかわかってきました。

「それで、やっと森のなかで一番高い木に巣をつくったばかりなのに」とハトの声があがってかなきり声になりました。「やっとあいつらから解放（かいほう）されたと思ったときに、空からくねくねふってくるんだから！　まったくヘビときたら！」

「だからぁ、**ヘビじゃない**って言ってるでしょう！」とアリス。「あ、あ、あたしは——」

「ふん、じゃああんた、いったい**なんなのさ！**」とハトが言います。「なんかでまかせ言おうとしてるわね！」

「あ、あたしは女の子よ」とアリスは、ちょっと自信なさそうに言いました。今日一日で自分がなんども変わったのを思いだしたからです。

「もうチトじょうずなウソついたらどうよ」とハトは、ものすごくバカにした口ぶりで言いました。「女の子なら、これまでたくさん見てきたけどね、そんな首したのは、**一人だって**見たことないよ！　いやいや、あんたヘビだよ。ごまかしたってダメだい。するとなんだい、こんどはたまごを食べたことないなんて言い出すんだろう！」

「たまごなら食べたことありますとも」アリスはとっても正直な子だったのです。「でも女の子だって、ヘビと同じくらいたまごを食べるのよ」

「信じるもんですか」とハトが言います。「でももしそうなら、女の子だってヘビの一種さね。あたしに言えるのはそんだけだよ」

これはアリスにしてみれば、まったく新しい考え方でしたので、一分かそこらはなにも言えませんでしたので、それをとらえて、ハトはこうつけくわえました。「あんたがたまごをさがしてるんだ、**そこんとこは**まちがいないね。だったらあんたが女の子だろうとヘビだろうと、あたしにゃなんのちがいもないだろが！」

「**あたしには**かなりのちがいなの！」とアリスはすぐに言いました。「でも、あいにくとたまごなんかさがしてないもん。それにさがしてても**あんたのなんか**いらないわ。なまたまごはきらいだもの」

「だったらさっさと失せな！」とハトはつっけんどんに言って、また自分の巣にもどりました。アリスは、なんとかかんとか森のなかで身をかがめました。というのも首があちこちでえだにからまってばかりいたので、そのたびに止まってほどかなくてはならなかったのです。しばらくして、自分がキノコのかけらをまだ手に持っていたのを思いだして、とっても気をつけて作業にかかり、まずは片方をかじって、それから反対側を、というぐあいにして、ときどきは大きくなって、ときどきは小さくなって、やがてなんとかいつもの大きさにもどったのでした。

まともな大きさくらいになったのは、ずいぶんひさしぶりでしたので、かえってかなりきみょうな感じがしました。でも数分でそれになれて、いつものように一人ごとをはじめました。「わーい、これで計画が半分たっせいだぞ！　こんなに変わるなんて、不思議よね！　毎分毎分、自分がなんになるのかちっともわかんない。でも、もとの大きさにはもどった、と。つぎはあのきれいなお庭に入ることね——それって**いったい**どうやったらいいだろ？」こう言ったとき、いきなりひらけた場所に出て、そこに高さ120センチくらいの小さなおうちがありました。「だれが住んでるのか知らないけど」とアリスは思いました。「**こんな**大きさでちかよるわけにはいかないわね。だって死ぬほどこわがらせちゃうわ！」そこでまた右手のかけらをかじりはじめて、身長25センチになるまで、けっしておうちには近づきませんでした。

目次にもどる

---

6. ぶたとコショウ



一分かそこら、アリスはそのままおうちをながめていて、つぎにどうしようかと思っていると、いきなりお仕着せすがたの召使い（めしつかい）が、森からかけだしてきました——（それが召使い（めしつかい）だと思ったのは、お仕着せをきていたからです。さもなければ、顔だけみたらそれはおさかなだと思ったはず）——そしてげんこつでそうぞうしくとびらをノックしました。それをあけたのは、これまたお仕着せすがたのべつの召使い（めしつかい）で、丸い顔とおおきな目をしてカエルみたいです。そして召使い（めしつかい）二人とも、おしろいをまぶしたかみの毛をしていて、それが頭一面でカールをまいています。いったいなんのさわぎかな、とアリスはすごく知りたくなって、ちょっと森からしのび出ると、きき耳をたてました。

おさかな召使い（めしつかい）は、まずうでの下からおっきな手紙をとりだしました。自分とほとんど同じくらいおっきな手紙です。そしてこれを相手にわたしながら、おもおもしい口ぶりでこう言いました。「公爵夫人どのへ～、女王さまより～、クロケーのごしょうたい～」。カエル召使い（めしつかい）は、同じようなおもおもしい口ぶりでくりかえしましたが、ことばの順番をちょっと変えました。「女王さまより～、クロケーのごしょうたい～、公爵夫人どのへ～」

そして両方とも、ふかぶかとおじぎをして、するとカールがからまってしまいました。

アリスはこれを見てゲラゲラわらってしまって、きこえるのがこわくて、森にかけもどったほどでした。そしてつぎにまたのぞいてみると、おさかな召使い（めしつかい）はいなくなっていて、もう片方が、とびら近くの地面にすわって、ぽかーんと空を見あげています。

アリスはおずおずととびらのところへいって、ノックしました。

「ノックなんかしてもむだよーん」と召使い（めしつかい）が言いました。「わけは二つね。まずあたしがあんたと同じで、ドアのこっち側にいるもんねー。つぎに、中ではすんごいそうぞうしいもんで、だれもあんたのノックなんかきこえやしないのよーん」そしてたしかに、中ではまあとんでもない大そうどうになってるようです——だれかずっと泣きわめいてはくしゃみをして、しょっちゅうものすごいガシャーンというお皿かやかんがこなごなになったみたいな音がするのです。

「おねがい、そうしたら、あたしはどうやって入ればいいのかしら」とアリス。

「ドアがあたしたちのあいだにあったら、あんたがノックしても、ちょいとはいみがあるかもしれないけど」と召使い（めしつかい）は、アリスにかまわず先をつづけます。「たとえば、あんたが**中にいたら**、ノックすれば、あたしが出したげられるんだけどねぇ」こういいながら、かれはずっと空を見あ

げたままで、アリスはこれはどう考えても、失礼せんばんだと思いました。「でも、しかたないのかもね」とアリスはつぶやきました。「だってお目目があんな頭の**すっごく**てっぺんにあるんですもん。でもそれにしても、きいたら返事くらいすればいいのに。——どうやって入ればいいの？」と声にだしてアリスはくりかえしました。

召使い（めしつかい）は言います。「あたしゃここにすわってるわぁ、あしたになっても——」

このときおうちのドアがあいて、おっきなお皿がシュルルッと、めしつかいの頭めがけてとんできました。そしてその鼻をかすめると、うしろの木にあたってこなごなになりました。

「——ひょっとしてあさってになっても」と召使い（めしつかい）はまったく同じ口ぶりで、なにもおきなかったみたいにつづけました。

「どうやって入ればいいの」とアリスは、もっと大きな声でいいました。

「そもそもあんた、**入っていいの**かしらねえ？」と召使い（めしつかい）。「まずそれが問題、でしょう、ねえ」

たしかにそうです、まちがいなく。でもアリスは、そんなこといわれたくありませんでした。「まったく頭にきちゃうわよね、この生き物たちが口ごたえするのって。キチガイになっちゃいそうよ」

召使い（めしつかい）は、このすきに、さっきのせりふをちょっと変えてくりかえそうと思ったようです。「あたしゃここにすわってるわぁ、ずっとずっと、何日も何日もぉ」

「でもあたしはどうすればいいの？」とアリス。

「お好きなように」と召使い（めしつかい）は口ぶえをふきはじめました。

「ああ、こんなのと話をしててもしょうがないわ」とアリスはぜつぼうして言いました。「完全なバカじゃないの！」そしてとびらをあけるとなかに入っていきました。

とびらはすぐに大きな台所につづいていて、そこははしからはしまでけむりまみれでした。公爵夫人はまん中にある三きゃくいすにすわって、赤ちゃんをあやしています。コックは火の上にかがみこんで、スープでいっぱいらしいおっきなおなべをかきまぜています。

「たしかにあのスープはコショウ入れすぎ」とアリスはつぶやきました。くしゃみをしながらつぶやくのもたいへんです。

それが空気にたくさんまじりすぎているのはたしかでした。公爵夫人でさえ、ときどきくしゃみをしています。そして赤ちゃんときたら、ちょっとも間をおかずに、くしゃみ、なき、わめきをくりかえしているのでした。台所でくしゃみをしないのは、コックと、ろばたにすわっているおっきなねこだけでした。ねこは、耳から耳までとどくくらいニヤニヤしています。



「あの、教えていただけませんでしょうか？」とアリスは、ちょっとびくびくしながらききました。自分から口をひらくのが、おぎょうぎのいいことかどうか、自信がなかったのです。「なぜこちらのねこは、あんなふうにニヤニヤわらうんでしょうか？」

「チェシャねこだから」と公爵夫人。「そのせいだよ。ぶた！」

最後のひとことは、いきなりすごいあらっぽさだったので、アリスはほんとにとびあがってしまいました。が、すぐにそれが赤ちゃんに言ったせりふで、アリスに言ったのではないのがわかりました。そこでゆうきをだして、またきいてみました：——

「チェシャねこがいつもニヤニヤわらうとは知らなかったです。というか、そもそもねこがニヤニヤわらい**できるって**知りませんでした」

「みんなできるよ。で、ほとんどみんなしてる」と公爵夫人。

「あたしは、してるねこは見たことないんです」とアリスはれいぎ正しく言いました。やっと会話ができたので、とてもうれしかったのです。

「あんたはもの知らずだからね。まちがいないよ」と公爵夫人。

アリスはこの意見の調子がぜんぜん気にいらなかったので、なにかべつの話題にしたほうがいいな、とおもいました。なにか思いつこうとしているあいだ、コックはスープのおなべを火からおろして、

すぐにまわりのものを手あたりしだいに、公爵夫人と赤ちゃんにむかってなげつけるしごとにとりかかりました――まずは火かきどうぐ。つづいて小皿、中皿、大皿の雨あられ。公爵夫人は、それがあたってもまったく無視していました。そして赤ちゃんは、もともとすさまじくわめいていたので、おさらがあたっていたいのかどうか、ぜんぜんわかりません。

「ああ、**おねがいだから**自分のやることに気をつけてよ！」とアリスはさけんで、怒ってかんしゃくをおこして、ぴょんぴょんとびはねました。「ほら、あの**かわいい**お鼻があんなことに」ちょうど、とんでもなくでっかなソース皿が赤ちゃんの鼻の近くをとんでいって、あやうくそれをもぎとるところでした。

「みんなが自分のやることだけ気をつけて、ひとごとに口出ししなけりゃ、この世はいまよりずっとずっとさっさと動くこったろうよ」と公爵夫人が、あらっぽいうなり声をあげました。

「それは**ぜったいに**困ったことですよね」とアリスは、ちしきをひけらかすチャンスができて、とてもうれしく思いました。「昼と夜がかわって、すごくたいへんなことになるはずですもの！　つまりですね、地球は一回まわるのに24時間かかって、昼と夜でおのおの――」

「おのといえば」と公爵夫人。「この娘（こ）の頭をちょんぎっちまいな！」

アリスはいささか心配そうにコックのほうを見ました。コックがいまのを本気にしたかな、と思ったのです。でもコックはスープをかきまぜるのにいそがしくて、きいていないようでしたので、アリスは続けました。「一日って24時間、**だったと**思うんですけど。それとも12でしたっけ？　あたし――」

「あら、あたしになんかきかないでよ」と公爵夫人。「あたしゃ数字はぜんぜんにがてなんだからね！」それからまた子どもをあやしはじめ、いっしょになんだか子もり歌みたいなものをうたいだしました。一行うたうごとに、赤ちゃんをすさまじくゆさぶっています。

*　　*　　*　　*　　*

「ガキにはあらっぽい口きいて
くしゃみしやがったらぶんなぐれ
どうせいやがらせでするくしゃみ
こっちが怒るの知ってやがる」

合唱

（ここでコックとあかちゃんもいっしょに）:--

「わぁ！　わぁ！　わぁ！」

*　　*　　*　　*　　*

公爵夫人は、歌の二番をうたいながら、赤ちゃんをらんぼうにポンポン投げています。そしてかわいそうな赤ちゃんがすごくわめくので、アリスはほとんど歌がきこえませんでした：――

*　　*　　*　　*　　*

「ガキにはきつい口をきく

くしゃみをしたらぶんなぐる
勝手なときにはコショウでも
しっかりきちんと味わうくせに！」

合唱

「わぁ！　わぁ！　わぁ！」

*　　　*　　　*　　　*　　　*

「ほれ、なんならあんたにもちょっとあやさせてやるよ！」と言いながら、公爵夫人は赤ちゃんを投げつけてよこしました。「あたしゃちょっと、女王さまとクロケーをするんでじゅんびがあるからね」そしてさっさと部屋を出てしまいました。コックは、その出ぎわにフライパンをなげつけましたが、おしいところではずれました。

アリスはずいぶんくろうして赤ちゃんをつかまえました。すっごくへんなかっこうの生き物で、あっちこっちに手足をつきだしてばかりいたからです。「ヒトデみたい」とアリスは思いました。かわいそうな子は、つかまえたときには蒸気機関車（じょうききかんしゃ）みたいみたいにフガフガ言っていて、しかもからだをまげたりのばしたりするので、そういうのがぜんぶあわさって、最初の一分かそこらは、かかえておくだけでせいいっぱいでした。

それをまともにあやすやり方がわかったので（ちなみに、それは赤ちゃんをひねって、いわばゆわえちゃって、そして右耳と左足をしっかりもって、それがほどけないようにしてやることだったんだけど）、アリスはすぐにそれを外につれだしました。「もしあたしがこの子をいっしょにつれてかないと、ぜったいに一日かそこらでころされちゃうものね。そんなところにのこしてったら、殺人でしょう？」アリスは最後のところを声に出していいました。すると生き物は、返事のかわりに鼻をならしました（このころには、くしゃみはやんでいたのです）。「鼻をならしちゃダメ。意見を言うのにぜんぜんちゃんとしたやりかたじゃないわよ」



赤ちゃんはまた鼻をならして、アリスはとっても心配になって、そのかおをのぞきこんでどうかしたのか見ました。まちがいなくこの子は、**とっても**上向きの鼻をしていて、人の鼻よりはブタの鼻ヅラみたいでした。それと、赤ちゃんにしては目がすっごく小さくなってきてます。ぜんぶあわせると、アリスとしてはこの子のようすがぜんぜん気に入りません。「でも、しゃくりあげただけかも」と思って目をのぞきこみ、涙がないかしらべました。

いいえ、涙はありません。「いい子だからね、ぶたになっちゃうなら、もうかまってあげませんからね！」とアリスはまじめに言いました。かわいそうな生き物は、またしゃくりあげます（あるいは鼻をならしたのか、どっちかはぜんぜんわかりません）。そして二人は、しばらくだまったままでいました。

「でもこの生き物をおうちにつれてかえったら、どうしてやったらいいんだろう」とアリスがちょうど思ったときに、そいつがまた鼻をならしました。それがすごくきょうれつで、アリスはびっくりしてその顔をのぞきこみました。こんどは、もうまちがえようがありません。それはまったくもってぶたそのものでした。だから、これ以上だっこしてやるのは、じつにばかげてる、と思いました。

そこでアリスはその小さな生き物を下におろし、するとしずかにトコトコと森にむかっていったので、ずいぶんホッとしました。「あれでおっきくなったら、しぬほどみっともない子どもになったでしょうね。でもぶたとしてなら、なかなかハンサムじゃないかな、と思う」そしてアリスは、知り合いのなかで、ぶたになったほうがうまくやっていけそうな子たちを思いうかべてみました。そして「もしちゃんとあの子たちを変えるほうほうさえわかれば——」とちょうどいったとき、何メートルか先の木の大えだに、あのチェシャねこがすわっていたので、アリスはちょっとぎょっとしました。

ねこは、アリスを見てもニヤニヤしただけです。わるいねこではなさそうね、とアリスは思いまし

た。が、**とっても**ながいツメに、とってもたくさんの歯をしていたので、ちゃんと失礼のないようにしないと、と思いました。



「チェシャにゃんこちゃん」とアリスは、ちょっとおずおずときりだしました。そういうよび名を気に入ってくれるかどうか、さっぱりわからなかったからです。でも、ねこはニヤニヤ笑いをもっとニッタリさせただけでした。「わーい、いまのところきげんがいいみたい」とアリスは思って、先をつづけました。「おねがい、教えてちょうだい、あたしはここからどっちへいったらいいのかしら」

「それはかなり、あんたがどこへいきたいかによるなあ」とねこ。

「どこでもいいんですけど——」とアリス。

「ならどっちへいってもかんけいないじゃん」とねこ。

「でも**どっかへは**つきたいんです」とアリスは、説明するようにつけくわえました。

「ああ、そりゃどっかへはつくよ、まちがいなく。たっぷり歩けばね」

アリスは、これはたしかにそのとおりだと思ったので、べつの質問をしてみました。「ここらへんには、どんな人がすんでるんですか？」

「**あっちの**方向には」とねこは、右のまえ足をふりまわしました。「帽子屋がすんでる。それと**あっちの**方向には」ともうかたほうのまえ足をふりまわします。「三月うさぎがすんでる。好きなほうをたずねるといいよ。どっちもキチガイだけど」

「でも、キチガイのとこなんかいきたくない」とアリスはのべます。

「そいつはどうしようもないよ。ここらじゃみんなキチガイだもん。ぼくもキチガイ、あんたもキチガイ」

「どうしてあたしがキチガイなんですか？」とアリス。

「ぜったいそうだよ。そうでなきゃここにはこない」とねこ。

アリスは、そんなのなんのしょうめいにもなってないとおもいました。でも、先をつづけます。「じゃあ、あなたはどうしてキチガイなの？」

「まずだね、犬はキチガイじゃない。それはいい？」

「まあそうね」とアリス

「すると、だ。犬は怒るとうなって、うれしいとしっぽをふるね。さて、ぼくはうれしいとうなって、怒るとしっぽをふる。よって、ぼくはキチガイ」

「それはうなるんじゃなくて、のどをならしてるっていうのよ」とアリス。

「お好きなように」とねこ。「女王さまときょう、クロケーをするの？」

「したいのはやまやまだけど。でもまだしょうたいされてないの」

「そこで会おうね」といって、ねこは消えました。

アリスはたいしておどろきませんでした。へんてこなことがおきるのに、もうなれちゃったからです。そしてねこがいたところを見ていると、いきなりまたあらわれました。

「ところでちなみに、赤ちゃんはどうなった？」とねこ。「きくのわすれるとこだった」

「ぶたになっちゃった」とアリスは、ねこがふつうのやりかたでもどってきたのとかわらない声で、しずかにいいました。

「だろうとおもった」ねこは、また消えました。

アリスはちょっとまってみました。ねこがまたでてくるかも、とおもったのです。が、でてこなかったので、一分かそこらしてから、三月うさぎのすんでいるはずのほうに歩きだしました。「帽子屋さんならみたことあるし、三月うさぎのほうがおもしろいわよね。それにいまは五月だから、そんなすごくキチガイでないかもしれない——三月ほどには」こういいながら、ふと目をあげると、またねこがいて木のえだにすわっています。

「ぶたって言った、それともふた？」とねこ。

「ぶた。それと、そんなにいきなり出たり消えたりしないでくれる？　くらくらしちゃうから」

「はいはい」とねこ。そしてこんどは、とてもゆっくり消えていきました。しっぽの先からはじめて、最後はニヤニヤわらい。ニヤニヤわらいは、ねこのほかのところが消えてからも、しばらくのこってい

ました。



アリスは思いました。「あらま！　ニヤニヤわらいなしのねこならよく見かけるけれど、でもねこなしのニヤニヤわらいとはね！　生まれて見た中で、一番へんてこなしろものだわ！」

ほんのしばらく歩くと、三月うさぎのおうちが見えてきました。まちがいないと思ったのは、えんとつが耳のかっこうをしていて、屋根が毛皮でふいてあったからです。あんまりおっきなおうちだったもので、左手のキノコをちょっとかじって、身長60センチくらいになってからでないと、近づきたくありませんでした。それでもなお、びくびくしながらちかづいて、その間もこう思っていました。「やっぱりすごくキチガイかも！　やっぱり帽子屋さんのほうに会いにいけばよかったかなあ！」

目次にもどる

---

7. キチガイお茶会

おうちのまえの木の下には、テーブルが出ていました。そして三月うさぎと帽子屋さんが、そこでお茶してます。ヤマネがそのあいだで、ぐっすりねてました。二人はそれをクッションがわりにつかって、ひじをヤマネにのせてその頭ごしにしゃべっています。「ヤマネはすごくいごこちわるそう。でも、ねてるから、気にしないか」とアリスは思いました。

テーブルはとてもおっきいのに、三名はそのかどっこ一つにかたまっていました。「満員、満員！」とアリスがきたのを見て、みんなさけびました。「どこが満員よ、**いっぱい**あいてるじゃない！」とアリスは怒って、そしてテーブルのはしのおっきなひじかけつきのいすにすわりました。

「ワインはいかが」と三月うさぎが親切そうに言います。

アリスはテーブル中をみまわしましたが、そこにはお茶しかのってません。「ワインなんかみあたらないけど」とアリス。

「だってないもん」と三月うさぎ。

「じゃあ、それをすすめるなんて失礼じゃないのよ」とアリスははらをたてました。

「しょうたいもなしに勝手にすわって、あんたこそ失礼だよ」と三月うさぎ。



「**あなたの**テーブルって知らなかったからよ」とアリス。「三人よりずっとたくさんの用意がしてあるじゃない」

「かみの毛、切ったほうがいいよ」帽子屋さんはアリスをすごくものめずらしそうに、ずいぶんながいことジロジロ見ていたのですが、はじめて言ったのがこれでした。

「人のこととやかく言っちゃいけないのよ」とアリスは、ちょっときびしく言いました。「すっごくぶさほうなのよ」

帽子屋さんは、これをきいて目だまをぎょろりとむきました。が、**言ったのは**これだけでした。「大ガラスが書きものづくえと似ているのはなーぜだ？」

「わーい、これでおもしろくなるぞ！　なぞなぞをはじめてくれてうれしいな」とアリスは思いました。

そして「それならわかると思う」と声に出してつけくわえました。

「つまり、そのこたえがわかると思うって意味？」と三月うさぎ。

「そのとおり」とアリス。

「そんなら、意味どおりのことを言えよ」と三月うさぎはつづけます。

「言ってるわよ」アリスはすぐこたえました。「すくなくとも——すくなくとも、言ったとおりのことは意味してるわ——同じことでしょ」

「なにが同じなもんか」と帽子屋さん。「それじゃあ『見たものを食べる』ってのと『食べるものを見る』ってのが同じことだと言ってるみたいなもんだ」

三月うさぎも追加します。「『もらえるものは好きだ』ってのと『好きなものがもらえる』ってのが同じだ、みたいな！」

ヤマネもつけくわえましたが、まるでねごとみたいです。「それって、『ねるときにいきをする』と『いきをするときにねる』が同じだ、みたいな！」

「**おまえのばあいは**同じだろうが」と帽子屋さんがいって、ここでお話がとぎれて、みんなしばらくなにもいわずにすわっていました。アリスは、大ガラスと書きものづくえについて、ありったけ思いだそうとしましたが、大して出てきません。

帽子屋さんが、まっ先にちんもくをやぶりました。「きょうって何日？」とアリスにききます。ポケットから時計をとりだして、それを困ったように見ながら、ときどきふったりしては、耳にあてています。

アリスはちょっと考えてから言いました。「四日（よっか）」

「二日（ふつか）もくるってる！」と帽子屋さんはためいきをつきました。そして、怒って三月うさぎをにらみつけました。「だからバターじゃダメだって言ったじゃねぇか！」

「**最高の**バターだったんだぜ」と三月うさぎは力なくこたえました。

「おぅ、でもパンくずがいっしょに入っちまったにちげえねぇ」と帽子屋さんはもんくをたれます。「おめぇがパンきりナイフなんかつかいやがるから」

三月うさぎは時計をうけとると、しょんぼりとそれをながめます。それからそれを自分のお茶にひたしてみてから、またながめました。でも、最初のせりふ以上のものはおもいつきませんでした。「**最高の**バターだったんだぜ」

アリスは興味（きょうみ）しんしんで、そのかたごしにながめていました。「ずいぶんへんな時計ね！　何日かわかるけど、何時かはわからないなんて！」

「そんなのわかってもしょうがねぇだろ」と帽子屋さん。「あんたの時計は、いまが何年かわかるのかい、え？」

「もちろんわかんないけど」とアリスは自信たっぷりにこたえます。「でもそれは、年ってかなりずっ

と長いことおんなじままだからよ」

「おれの場合もまさにおんなしこった」と帽子屋さん。

アリスはものすごく頭がこんがらがってきました。帽子屋さんの言ったことは、まるでなんの意味もないようですが、でもちゃんと文にはなってるのです。「どうもよくわからないみたいです」とアリスは、できるだけていねいに言いました。

「ヤマネのやろう、またねてやがる」と帽子屋さんは、ヤマネの鼻ヅラにちょっとあついお茶をかけました。

ヤマネはあわてて頭をふると、目をあけずにいいました。「いや、まったくまったく。おれもそう言おうと思ってたところ」

「なぞなぞはわかったかよ」と帽子屋さんは、またアリスに話しかけました。

「だめ、こうさん。こたえはなに？」とアリスはこたえました。

「さっぱり見当もつかない」と帽子屋さん。

「わしも」と三月うさぎ。

アリスはうんざりしてため息をつきました。「もう少しましに時間をつかったら？　それを、答のないなぞなぞなんか聞いて、むだにしたりして」

「おれくらい時間と仲がよけりゃ、**それ**をむだにするなんて言い方はせんね。**やつ**だよ」

「なんのことやらさっぱり」とアリス。

「そりゃあんたにゃわかるめぇよ！」と帽子屋さんは、バカにしたようにみえをきりました。「どうせ、時間と口きぃたこともねぇんだろ！」

「ないかも」とアリスはしんちょうに答えます。「でも、音楽を教わるときには、こうやって時間をきざむわよ」

「おぅ、それだそれ、そのせいだよ」と帽子屋さん。「やつだってきざまれたかねぇやな。いいか、やつとうまいことやりさえすりゃあ、やつは時計がらみのことなら、ほとんどなんでも塩梅（あんばい）してくれらぁね。たとえば、朝の9時で、ちょうど授業の始まる時間だ。でもそこで時間にちょいと耳うちすれば、いっしゅんで時間がグルグルと！　さあ午後一時半、ばんごはんの時間だよ！」

（「いまがそうならねえ」と三月うさぎは小声でつぶやいた。）

「そうなったら、なかなかすごいでしょうねえ、たしかに」とアリスは、考えぶかげにいいました。「でもそしたら――あたしはまだおなかがすいてないわけよねえ」

「最初のうちは、そうかもしんねぇけど」と帽子屋さんが言いました。「でも、いつまでも好きなだけ一時半にしとけるんだぜ」

「あなた、**そんなことして**くらしてるんだ」とアリス。

帽子屋さんは、かなしそうに頭をふります。「おれはちがうよ。おれと時間は、こないだの三月に口論してさぁ――ちょうど**あいつが**キチガイになるちょっと前だったけどね――」(と三月うさぎを茶さじで指さします)「――ハートの女王さまがやった大コンサートがあって、おれもうたうことになったんよ」

* * * * *

「きらきらコウモリよ
おそらで謀(はか)る！」

* * * * *

知ってるだろ、この歌？」

「なんかそんなようなのは、きいたことある」とアリス。

帽子屋さんはつづけます。「それでさ、こんなふうにつづくじゃないか:

* * * * *

「世界のうえを
お盆(ぼん)の飛翔(ひしょう)
きらきら――」

* * * * *



ここでヤマネがみぶるいして、ねむりながらうたいはじめました。「きらきら、きらきら、きらきら――」そしてこれをいつまでもつづけたので、みんなでつねってなんとかやめさせました。

「うん、それでおれが歌の一番もうたいおわらないうちに、女王さんがとびあがって、ぎゃあすか言いやがってさ、『こやつ、ひょうしの時間をバラバラにしておるではないか！　首をちょん切れ！』

「まあなんてひどいざんこくな！」とアリスはさけびます。

「で、それからずっと、時間のやつったら、バラバラにされたのを根にもって、おれのたのみをいっこうにきいてくれやしねぇんだ。だからいまじゃずっと6時のまんまよ」

急にアリスはひらめきました。「じゃあそれで、お茶のお道具がこんなに出てるのね？」

「そ、そゆこと」と帽子屋さんはためいきをつきました。「いつでもお茶の時間で、あいまに洗ってるひまがないのよ」

「じゃあ、どんどんずれてくわけ」とアリス。

「ごめいとう。使いおわるとだんだんずれる」

「でも最初のところにもどってきたらどうなるの？」アリスはあえてきいてみました。

三月うさぎがわりこみました。「そろそろ話題を変えようぜ。もうあきてきたよ。このおじょうちゃんがお話をしてくれるのに一票」

「悪いんですけど、なにも知らないの」とアリスは、この提案にかなりびっくりして言いました。

「じゃあヤマネにやらせろ！」と二人はさけびました。「おいヤマネ、起きろってば！」そして両側から同時につねりました。

ヤマネはゆっくり目をあけました。「ねてないよぉ」と、しゃがれたよわよわしい声で言います。「おまえたちのせりふ、ぜーんぶきいてたよぉ」

「お話してくれよぅ！」と三月うさぎ。

「ええ、おねがい！」とアリスもたのみます。

帽子屋さんが言います。「それと、さっさとやれよ。さもねぇと、おわんないうちにねちまうだろ、おめぇ」

ヤマネはあわててはじめました。「むかしむかし、三人姉妹がいなかに住んでおりました。なまえは、エルシー、レイシー、ティリー。そしてこのいなか姉妹は、井戸のそこに住んでいまして――」

「なにを食べてたの？」アリスは、食べたりのんだりする質問に、いつもすごく興味（きょうみ）があったのです。

「とうみつを」とヤマネは、一分かそこら考えこんでからいいました。

「そんなこと、できるはずないわ」アリスはしずかにもうしました。「だって病気になっちゃうもの」

「まさにそのとおり」とヤマネ。「**とっても**病気でした」

アリスは、そんなとんでもない生き方ってどんなものか、想像してみようとしました。でもなぞが多すぎたので、つづけました。「でも、なんだって井戸のそこになんかに住んでたの？」

「茶ぁもっとのみなよ」と三月うさぎが、とってもねっしんにアリスにすすめました。

「まだなにものんでないのよ。だからもっとなんてのめないわ」アリスはむっと返事をします。

「**ちょっと**はのめない、だろ。なにものんでないなら、ゼロより**もっと**のむなんてかんたんだぁ」と帽

子屋さん。

「だれも**あんたになんか**きいてないわ」とアリス。

「ひとのこととやかく言うなってったの、だれだっけねぇ」と帽子屋さんは勝ちほこってききました。

　アリスはなんとこたえていいかわかりませんでした。だからお茶とバターパンをちょっと口にして、それからヤマネにむかって質問をくりかえしました。「その子たち、なんで井戸のそこに住んでたの？」

　ヤマネはまた一分かそこら、それについて考えてから言いました。「とうみつ井戸だったのです」

「そんなものあるわけないでしょう！」アリスは怒り狂って言いかけましたが、帽子屋さんと三月うさぎが「シイッ！　シイッ」と言って、そしてヤマネはきつい口ぶりで言いました。「れいぎ正しくできないんなら、話のつづきはあんたがやってくれよ」

「いえおねがい、つづけてください！」アリスはつつましく言いました。「もうじゃまはしませんから。とうみつ井戸も、**ひとつくらいなら**あるかも」

「ひとつくらい、だと！」ヤマネはおもしろくなさそうです。でも、先をつづけることには同意してくれました。「そこでこのいなか姉妹三人は――お絵かきをならってました。ほら――」

「なにをかいたの？」とアリスは、やくそくをすっかりわすれてききます。

「とうみつ」とヤマネは、こんどはぜんぜん考えずにいいました。

「きれいなお茶わんがほしーぜ」と帽子屋さんがわりこみます。「みんな一つずつずれろ」

　そういいながら帽子屋さんが動いて、ヤマネがつづきました。三月うさぎがヤマネのせきにうごいて、アリスはいやいやながら三月うさぎのせきにつきました。動いてちょっとでもとくをしたのは、帽子屋さんだけです。そしてアリスはさっきよりずっと悪いせきになりました。三月うさぎが、ちょうどミルク入れをお皿にひっくりかえしたばかりのせきだったからです。

　アリスは二度とヤマネのきげんをそこねたくなかったので、とても用心してきりだしました。「でも、わかんないんですけど。そのいなか姉妹って、どこからとうみつをかいたの？」

「水の井戸から水をかいだすののとおんなじだよぅ」と帽子屋さん。「だからとうみつ井戸からだってとうみつをかいだせるだろが――このバーカ」

「でも、そのいなか姉妹たちって、井戸の**中に**いたんでしょ？」アリスは、いま帽子屋さんのいったことは、むしすることにしてヤマネにききました。

「そうそう」とヤマネ。「だから井中（いなか）姉妹」

　このこたえに、かわいそうなアリスはとてもまごついてしまって、ヤマネがつづけてもしばらくはわりこみませんでした。

　ヤマネは、あくびをして目をこすりながらつづけます。「この子たちはお絵かきをならっていて、い

ろんなものをかきました——まみむめもではじまるものならなんでも——」

「どうしてまみむめも？」とアリス。

「なんかいけない？」と三月うさぎ。

アリスはだまりました。

ヤマネはこのあたりでそろそろ目を閉じて、うつらうつらしはじめていましたが、帽子屋さんにつねられて、またちょっとひめいをあげてとびおきて、先をつづけました。「——まみむめもではじまるものならなんでも——たとえば『まんじゅう』とか『みらい』とか、『むずかし』とか『めんどう』とか、『もう』とか——ほら、『もうたくさん』っていうでしょ——あんた、もうの絵なんて見たことある？

「さてさて、そう言われてもあたしだってそんなこと」とアリスは、頭がすごくこんがらがって言いました。「いままで考えたこともないし——」

「じゃあだまってな」と帽子屋さん。

この無礼さかげんには、もうアリスはがまんできませんでした。思いっきり顔をしかめて立ちあがり、歩きさっていきました。ヤマネはすぐにねてしまい、ほかの二人はどっちも、アリスがいっちゃってもまるで気にしませんでした。アリスのほうは、一、二回ほどふりかえって、もどってこいと言ってくれないかな、とちょっと思ったりもしたのですが。最後にふりかえったとき、二人はヤマネをお茶のポットにおしこもうとしていました。



「どうしたって、もうにどと**あそこには**もどりませんからね！」とアリスは、森の中の道をすすみながら言いました。「生まれてから出たなかで、いっちばんばかばかしいお茶会だったわ！」

こう言ったとき、木の一つに中に入るとびらがついているのに気がつきました。「あらへんなの。でも今日って、なにもかも変よね。だからこれも入っちゃおう」そして入ってみました。

きがつくと、アリスはまたもやあのながい廊下にいて、近くにはあの小さなガラスのテーブルもあります。「さて、こんどはもっとうまくやるわ」とつぶやいて、まずは小さな金色の鍵をとって、お庭につづくとびらの鍵をあけました。それからキノコをかじりだして（かけらをポケットに入れてあったのです）、身のたけ30センチくらいにしました。それから小さな通路を歩いてぬけます。そして**やっと**——ついにあのきれいなお庭にやってきて、あのまばゆい花だんやつめたいふん水のあいだを歩いているのでした。

目次にもどる

---

8. 女王さまのクロケー場



お庭の入り口には、おおきなバラの木が立っていました。そこにさいているバラは白でしたが、そこに庭師が三人いて、それをいっしょうけんめい赤くぬっていました。アリスは、これはずいぶん変わったことをしていると思って、もっとよく見ようと近くによってみました。ちょうど近くにきたら、一人がこう言ってるところでした。「おい五、気をつけろ！　おれをこんなペンキだらけにしやがって！」

「しょうがないだろ」と五は、きつい口ぶりで言いました。「七がひじを押したんだよ」

すると七が顔をあげていいました。「そうそうその調子、いつも人のせいにしてりゃいいよ」

「**おまえは**しゃべるんじゃない！」と五。「女王さまがついきのうも、おまえの首をちょん切るべきだって言ってたぞ！」

「どうして？」と最初にしゃべったのが言います。

「二！　**おまえには**かんけいない！」と七。

「かんけい、大ありだよ！」と五。「だから話しちゃうもんね——コックに、タマネギとまちがって

チューリップの球根をもってったからだよ」

七はペンキのはけをふりおろして、ちょうど「まあだまってきいてりゃいい気になりやがって——」と言いかけたところで、たまたまアリスが目に入りいましたので、いきなり身をとりつくろっています。ほかの二人も見まわして、みんなふかぶかとおじぎをしました。

「ちょっとうかがいますけど」とアリスは、こわごわきいてみました。「なぜそのバラにペンキをぬってるんですか？」

五と七はなにもいわずに、二のほうを見ます。二は、小さな声でこうきりだしました。「ええ、なぜかといいますとですね、おじょうさん、ここにあるのは、ほんとは**赤い**バラの木のはずだったんですがね、あっしらがまちがえて白いのをうえちまったんですわ。それを女王さまがめっけたら、みーんなくびをちょん切られちまいますからね。だもんでおじょうさん、あっしらせいいっぱい、女王さまがおいでになるまえに——」このとき、お庭のむこうを心配そうに見ていた五が声をあげました。「女王さまだ！　女王さまだ！」そして庭師三名は、すぐに顔を下にはいつくばってしまいました。足音がたくさんきこえて、アリスは女王さまが見たかったのでふりむきました。

まずはこん棒を持った兵隊さんが十名。みんな庭師三名とおんなじかたちをしています。長方形で平べったくて、かどから手と足がはえてます。つぎに廷臣（ていしん）たち十名。これはみんな、ダイヤモンドで全身をきかざって、兵隊さんたちと同じく、二名ずつでやってきました。そのあとからは王さまの子どもたち。このかわいい子たちは、手に手をとってたのしそうにぴょんぴょんはねながら、二名ずつでやってきます。ぜんぶで十名いて、みんなハートのかざりだらけです。つづいてはお客たちで、ほとんどが王さまや女王さまたちですが、アリスはそのなかにあの白うさぎがいるのを見つけました。はや口で心配そうにしゃべっていて、だれがなにを言ってもにこにこして、アリスに気がつかずにとおりすぎました。それからハートのジャックがきます。王さまのかんむりを、真紅（しんく）ビロードのクッションにのせてはこんでいます。そしてこのおもおもしい行列の一番最後に、**ハートの王さまと女王さまが**やってまいりました。

アリスは、自分も庭師三名と同じようにはいつくばったほうがいいのかな、とまよいましたが、王さまの行列でそんなきそくがあるなんて、きいたことはありませんでした。「それに、もしみんなが顔を下にはいつくばって、だれも行列を見られなければ、行列なんかしたってしょうがないじゃない？」そう思ってアリスは、そのまま立って、まっていました。

行列がアリスの向かいにやってくると、みんな止まってアリスをながめました。そして女王さまがきびしい声でききます。「これはだれじゃ！」きかれたハートのジャックは、へんじのかわりににっこりおじぎをしただけでした。

「ばかものめが！」と女王さまは、きぜわしく何度もふんぞりかえります。そしてアリスにむかってつづけました。「そこな子ども、名前は？」

「アリスともうします、女王陛下」とアリスはとってもれいぎ正しくもうしました。でもそのあとでこう思いました。「でも、これみんなただのトランプなんだわ。なんにもこわがることないわね！」

「して**こやつらは**だれじゃ？」と女王さまは、バラの木のまわりにはらばいになっている庭師たちを指さしました。というのも、顔を下にしてはいつくばっていたし、せなかのもようはみんないっしょな

ので、女王さまはそれが庭師か、兵隊さんか、廷臣（ていしん）たちか、それとも自分の子どものうち三名なのか、わからなかったのです。

「あたしにわかるわけないでしょう」アリスはこう言って、自分のゆうきにわれながらびっくりしました。「**あたしには**かんけいないことですから」

女王さまは怒ってまっ赤になり、そして野獣みたいにしばらくアリスをにらみつけてから、ぜっきょうしました。「こやつの首をちょん切れ！　こやつの——」



「ばかおっしゃい！」とアリスは、とても大声できっぱりと言いまして、すると女王さまはだまってしまいました。

王さまが手を女王さまのうでにかけて、びくびくしながら言います。「まあまあ、まだ子どもじゃないか！」

女王さまは怒って王さまからはなれ、ジャックにいいました。「こやつらをひっくりかえせ！」

ジャックはとてもしんちょうに、片足でそうしました。

「立て！」と女王さまが、かんだかい大声で言うと、庭師三名はすぐにとびおきて、王様と、女王さまと、お子たちと、そのほかみんなにぺこぺこおじぎをはじめました。

「やめんか！　めまいがする！」と女王さまがどなります。そしてバラの木のほうを見てつづけました。「ここで**いったいなにを**しておった？」

「おそれながらもうしあげますと、女王陛下どの」と二がとてもつつましく、片ひざをついて言いました。「てまえどもがしており——」

「なるほど！」女王さまは、その間にバラの木を調べておりました。「こやつらの首をちょん切れ！」そして行列がまたうごきだしましたが、兵隊さんが三名のこって、かわいそうな庭師たちの首をはねようとしますので、庭師たちはアリスに助けをもとめてかけよってきました。

「首なんか切らせないわ！」とアリスは、近くにあったおっきな花びんに庭師たちを入れてあげました。兵隊さん三名は、一分かそこらうろうろしてさがしていましたが、だまってほかのみんなのあとから行進してきます。

「あやつらの首はちょん切ったか！」と女王さまはさけびます。

「あのものどもの首は消えてしまいました、女王陛下どの！」と兵隊たちがさけんでこたえました。

「よろしい！　おまえ、クロケーはできる？」

兵隊たちはだまってアリスのほうを見ました。この質問が明らかにアリスむけだとでもいうように。

「ええ！」とアリス。

「ではおいで！」と女王さまがほえ、アリスは行列にまじって、これからどうなるのかな、と心から思いました。

「いやなんとも——よいお天気ですな」とびくびく声がよこできこえました。となりを歩いていたのは白うさぎで、こちらの顔を心配そうにのぞきこんでいます。

「ええとっても」とアリス。「——公爵夫人はどちら？」

「これうかつなことを！」とうさぎは、小さな声ではや口にもうします。こう言いながらも、かたごしに心配そうにのぞいて、それからつま先だちになって、アリスの耳近くに口をもってきてささやきました。「公爵夫人は死刑宣告をうけたのですよ」

「どうして？」

「いま、『まあかわいそうに』とおっしゃいましたか？」とうさぎ。

「いいえ、言ってませんけど。ぜんぜんかわいそうだと思わないし。『どうして？』っていったんです」

「女王さまの横っつらをなぐったんです——」とうさぎが言って、アリスはゲラゲラわらってしまいました。うさぎがちぢみあがってささやきます。「ああおしずかに！　女王さまのお耳にとどきます！　じつはですな、公爵夫人はいささかおくれていらっしゃいまして、女王さまがそこで——」

「位置について！」と女王さまが、かみなりのような声でどなりまして、みんなあちこちかけまわりだして、おたがいにごっつんこしてばかりいます。でも、一分かそこらでみんなおちついて、試合開始です。アリスは、こんなふうがわりなクロケー場は見たこともないと思いました。そこらじゅう、うねやみぞだらけ。玉は生きたアナグマで、マレットは生きたフラミンゴ、そして兵隊さんたちがからだを

おって四つんばいになって、ゲートをつくっているのです。



　アリスがまず一番くろうしたのは、フラミンゴをじっとさせておくことです。フラミンゴのからだは、なんとかうまいぐあいにうでの下におさめて、足をたらすようにしたのですけれど、でもだいたい、ちょうど首をきちんとのばさせて、その頭でアナグマをたたこうとしたとたんに、フラミンゴはぐいっと首をねじって、アリスの顔を見あげます。そしてその顔が、いかにもわけわかりませんという顔つきなので、ついふきだしてしまいます。さらに頭を下げさせて、もう一回やってみようとすると、アナグマがまるまるのをやめて、もぞもぞあっちへいってしまおうとしているので、すごく頭にきます。おまけに、アナグマをむかわせたい方向には、たいがいうねやみぞがあったし、それに四つんばいの兵隊さんたちも、しょっちゅうおきあがってはクロケー場のよそにうろうろしています。アリスはじきに、こいつはじつにむずかしいゲームだぞ、という結論にたっしました。

　参加者たちはみんな、順番をまったりしないで、いっぺんに玉をうっていて、そのあいだずっといいあらそっては、アナグマをとりあってけんかしてます。そしてじきに女王さまはカンカンに怒って、そこらじゅうズシズシうろついては、「あやつの首をちょん切れ！」だの「こやつの首をちょん切れ！」だの一分に一度くらいはわめいています。

　アリスはとってもいや一な気持ちになってきました。そりゃたしかに、自分はまだ女王さまとはもめていませんけれど、でもそれがすぐにでもおきかねないのはわかります。「そうなったらあたし、どうなっちゃうの？　ここではみんな、首切りが大好きなんだもの。まだ生きてる人がいるほうが不思議ってもんだわ！」

　アリスは、なんとかにげだすほうほうはないか、さがしていました。見られずににげられないもの

かと思っているところへ、宙に変なものがあらわれているのに気がつきました。最初はとっても首をひねりましたが、一分かそこらながめていると、それがニヤニヤわらいだとわかりました。「あら、チェシャねこだわ。これでお話相手ができた」

「ちょうしはどうだい」ねこは、しゃべれるだけのものがあらわれたとたんに言いました。

アリスは、目があらわれるまでまってから、うなずきました。「両耳が出てからじゃないと、話してもむだね。片耳でもいいけど」一分かそこらで、頭がぜんぶあらわれたので、アリスはフラミンゴをおいて、試合のようすを話しだしました。ねこは、もうじゅうぶんにあらわれたと思ったらしくて、頭から先はもう出てきませんでした。

「ぜんぜん公平にやってないと思うわ」とアリスは、ちょっとぐちっぽくきりだしました。「それにみんな、ものすごくけんかばかりで、自分の声もきこえやしない——それにルールがぜんぜんないみたいなの。あったとしても、だれもそんなのまもってないわ——それに、なんでもかんでも生きてるから、もうすっごくややこしいのよ。たとえばあそこ、あたしがこんどくぐるはずのアーチは、クロケー場のむこっかわのはしをウロウロしてるし——それにいまは女王さまのアナグマにあてるはずが、あたしのアナグマを見たら、にげだしちゃったんだから！」

「女王さまは気にいった？」とねこは小声でききました。

「ぜーんぜん」とアリス。「だってすごく——」ちょうどそこで、女王さまがすぐうしろにいて、きき耳をたてているのに気がつきました。そこでつづけます。「——おじょうずで、勝つにきまってるんですもの、試合を最後までやるまでもないくらい」

女王さまはにっこりして、よそへいってしまいました。

「だれと話をしとるのかえ？」と王さまがアリスのところにやってきて、ねこの頭をとても不思議そうにながめました。

「あたしのお友だちでございます——チェシャねこなんですよ。しょうかいさせていただけますか」

「どうもようすがまるで気にいらん」と王さま。「しかし、のぞみとあらば、わが手にせっぷんを許してつかわす」

「やめとく」とねこ。

「失敬なことを！　それと、わしをそんな目で見るな！」と王さまは、アリスのうしろにかくれてしまいました。

「ねこだって王さまを見るくらいはできる。どっかでそう読んだんですけれど、どこでかはわすれました」とアリス。

「ふん、こやつはここにいてはまかりならん」と王さまはとてもきっぱりもうしまして、ちょうどとおりすがりの女王さまによびかけました。「妻や！　おまえ、このねこをどうにかしてもらえんかね？」

女王さまは、問題があればその大小をとわず、解決法は一つでした。「首をちょん切れ！」とまわりを見もしないで申します。

「わしみずから首切り役人をつれてまいるとしよう」と王さまはうれしそうに言って、いそいで出かけました。

アリスは、いまのうちにもどって試合のようすを見てみよう、と思いました。女王さまが、カッカしてわめきちらしているのが遠くできこえたからです。順番をのがしたせいで、参加者が三名、もう死刑にされたのがきこえたし、試合はもうめちゃくちゃで、自分の順番かどうかぜんぜんわからなかったので、これじゃなんだかまずいぞ、と思いました。そこで自分のアナグマをさがしにでかけました。

アナグマはべつのアナグマとけんかのまっさいちゅうで、だからアナグマどうしをぶつけるにはぜっこうのチャンス、とアリスは思いました。ただ一つ困ったことに、フラミンゴがお庭のむこう側にいってしまっていて、そこでアリスが見たところ、木にとびあがろうとして、むだにがんばっています。

フラミンゴをつかまえてもどってきたころには、アナグマのけんかも終わっていて、二匹ともいなくなっていました。「でもどうでもいっか。クロケー場のこっち側は、ゲートがぜんぶいなくなっちゃってるし」そう思ってアリスは、フラミンゴがまたにげださないように、うでの下にしっかりとかかえて、お友だちともっとおしゃべりしようと、もどっていったのです。

チェシャねこのところにもどってみると、まわりにかなりおっきな人ごみができていたのでおどろきました。首切り役人と王さまと女王さまが、論争(ろんそう)をしています。三名は同時にしゃべっていますが、それ以外はみんなだんまりで、すごくもじもじしています。



アリスがすがたを見せたとたん、その三名がいっせいに自分の意見をうったえてきて、問題を解決してくれ、といいます。そして三名とも自分の言いぶんをくりかえすのですが、みんな同時にしゃ

べるので、いったいそれぞれなにを言ってるのか、きちんと理解するのは、とてもたいへんでした。

首切り役人の言いぶんは、首を切りおとすには、まずその首がどこかのからだにくっついていなくちゃダメだ、というものです。首だけの首を切りおとすなんて、いままでやったこともないし、だからいまさら**この歳（とし）になって**はじめるつもりもないよ、と言います。

王さまの言いぶんは、首がそこにあるんだから、それを切りおとすだけのことでなんの問題もない、へりくつをもうすな、というものでした。

女王さまの言いぶんは、いますぐなんとかしないと、みんな一人のこらず死刑にしてやる、というものでした（この最後のことで、みんなあんなに困って不安そうだったのです）。

アリスとしてはなんと言っていいかわかりませんでした。「あれは公爵夫人のものだわ。だから**公爵夫人に**おききになったほうがいいわよ」

「あやつはろうやにおるぞ。つれてまいれ」と女王さまが首切り役人にもうしますと、役人は矢のようにびゅーんととんでいきました。

役人がいってしまったとたんに、ねこの頭は消えだしまして、公爵夫人をつれて役人がもどってきたころには、もう完全に消えてしまいました。だから王さまと役人はあちこちかけずりまわって、必死でねこをさがし、ほかのみんなは試合にもどっていきました。

目次にもどる

---

9. にせウミガメのお話

「またお目にかかれてどんなにうれしいか、あなた見当もつかないでしょう、このかわいいおじょうちゃんったら！」と公爵夫人は、愛情（あいじょう）たっぷりにアリスにうでをからめてきて、二人は歩きだしました。

夫人がずいぶんごきげんうるわしいので、アリスはとてもうれしく思いました。そして台所であったときにあんなにあれ狂ってたのは、コショウのせいでしかなかったのかも、と思いました。

「**あたしが**公爵夫人になったら」とアリスはつぶやきました（が、自分でもあまり見こみあるとは思ってなかったけど）「台所にはコショウなんか、**ぜーんぜん**おかないんだ。スープはコショウなしでもじゅうぶんおいしいもの――人がカッカしちゃうのは、みんなからいコショウのせいなのかも」アリスは、新しい規則みたいなものを見つけたので、とても得意になってつづけました。「それでみんながにがにがしくなるのはサンショウのせいなんだ――しぶくなるのは、茶しぶのせいで――それで――それで子どもがニコニコしてるのは、おさとうとかのせいで。みんながこれをわかってくれればいいのに。そうしたら甘いもの食べすぎてもあんなに怒らないだろうし――」

おかげですっかり公爵夫人のことをわすれてしまっていたので、耳のすぐ近くで声がきこえてちょっとびっくりしてしまいました。「なにか考えごとをしていたでしょう、それで口がおるすになるんですよ。その教訓がなんだか、いまは話せないけれど、しばらくしたら思いだしますからね」

「教訓なんかないんじゃありませんか？」アリスは勇気を出して言ってみました。

「これこれ、おじょうちゃん。どんなことにも、教訓はあるですよ、見つけさえすれば」こう言いながら、夫人はアリスの横にもっとギュッと身をよせてきました。

アリスは、夫人とこんなにくっついているのは、あんまり気に入りませんでした。まず、公爵夫人は**すっごく**ブスだったからで、さらにちょうどあごがアリスのかたにのっかるせたけで、しかもいやんなるくらいすごくとがったあごだったからです。でも、失礼なことはしたくなかったので、なるべくがまんすることにしました。

「試合はちょっとましにすすんでるようですね」とアリスは、間をもたせようとして言いました。

「いやまったく」と公爵夫人。「してその教訓は――『ああ、愛こそが、愛こそがこの世を動かす！』」

「だれかさんは、みんなが自分のやることだけ気をつけてりゃ動くって言ってませんでしたっけ」とアリスはささやきました。

「ああそうでしたっけ。でも言ってることはまあ同じですよ」そう言いつつ、夫人はとがったあごをアリスのかたにつきさします。「そしてその教訓は――『安言（やすごと）づかいの意味（いみ）うしない』」

「教訓さがしが、ほんっとに好きなのねえ」とアリスは思いました。



　夫人はちょっと間をおいて言いました。「ひょっとして、わたしがなぜおじょうちゃんのこしに手をまわさないのかな、と思ってるんでしょう。そのわけはね、そのフラミンゴがかみつくんじゃないかって、ちょっと心配なのよ。ちょっと実験してみましょうか？」

「**ずいぶん**ピリピリしてますよ、このフラミンゴ」アリスは不安そうにこたえました。そんな実験をためしてほしいとは、これっぽっちも思いません。

「おっしゃるとおり」と公爵夫人。「フラミンゴとカラシはどっちもピリピリしてますからねえ。そしてその教訓は——『たつ鳥あとをにごさず』」

「ただカラシは鳥じゃないでしょう」とアリス。

「いつもながら、おっしゃるとおり」と公爵夫人。「なにごともそうやって、ちゃーんとせいとんできてるのねえ」

「**たしか**鉱物（こうぶつ）だったと思うけど」とアリス。

「もちろんさよう」公爵夫人は、いまではアリスが言うことならなんでもさんせいするみたいです。「このあたりの山では、カラシをいっぱいほってますわよ。そしてその教訓は——『権兵衛（ゴンベ）が山ほりゃ、カラシをほじくる』」

　アリスはいまの夫人のせりふをきいていませんでした。「あ、わかった！　あれは植物よ！　ちっとも植物らしくないけれど、でもそうよ」

「いやはやまったくそのとおり。そしてその教訓とは——『自分らしくなろう』——あるいはもっとかんたんに言えば——『自分がそうであったりそうであったかもしれないものが、自分が他人にそうでないと思われたものでないもの以外のものとして見られるもの以外のものでないと思わないこと』

訳者のおねがい：論理的にこれであってるかどうか自信がないので、だれかチェックしてほしいんだけど。

「いまのは、かみに書いたらもっときちんとわかると思いますけれど、でもそうやっておっしゃっただけだと、なかなかついてけませんでした」アリスはとてもれいぎ正しく言いました。

「わたしがその気になったら、いまのなんかメじゃないですよ」と公爵夫人は、うれしそうに返事しました。

「おねがいだから、いまよりながく言おうとなんかなさらないで、お手間でしょうから」とアリス。

「おやまあ、手間だなんてとんでもない！」と公爵夫人。「これまで申し上げたことはすべて、プレゼントとしてさしあげますですわよ」

「ずいぶん安上がりなプレゼントですこと！」とアリスは思いました。「おたんじょう日のプレゼントがそんなのでなくてよかったわ！」でもこれはもちろん口には出しませんでした。

「また考えごと？」と伯爵夫人は、またまたあごでつついてきます。

「あたしにだって考える権利があります！」アリスはきっぱりといいました。だんだん心配になってきたからです。

「ちょうどぶたに空とぶ権利があるように。そしてそのきょうく――」

　でもここで、アリスがとってもおどろいたことに、公爵夫人の声がとぎれました。大好きな「教訓」ということばのどまんなかだったのに。そしてアリスのにからめたうでが、ガタガタふるえはじめました。目をあげると、まんまえに女王さまが立っていて、うで組みして、かみなり嵐みたいなしかめっつらをしています。

「なんともすばらしいお天気でございます、陛下！」公爵夫人が、小さなよわよわしい声で言いかけました。

「さぁて、きちんと警告を出してやろうぞ」と女王さまは地面をふみならしてどなります。「おまえか、おまえの頭のどちらかが消えうせるのじゃ、しかもいますぐに！　すきなほうを選ぶがよい！」

　公爵夫人はすきなほうを選んで、いっしゅんですがたを消しました。

「試合を続けるがよいぞ」女王に言われたアリスは、おっかなくて一言もいえずに、だまって女王さまについてクロケー場にもどりました。

　ほかのお客たちは、女王さまがいないのをいいことに、ひかげで休んでいました。でも、すがたが見えたとたんに、あわてて試合にもどりました。女王さまが、一刻でもおくれたらいのちはないよ、ともうしわたしただけなのに。

　みんなの試合中、女王さまはずっとほかのプレーヤーたちといいあらそってばかりいて、「あやつの首をちょん切れ！」だの「こやつの首をちょん切れ！」だのとどなっています。女王さまに死刑せんこくされた人たちは、兵隊さんたちに連行（れんこう）されるのですが、するとその兵隊さんは、ゲート役をやめなくてはならず、そしてプレーヤーたちも王さまと女王さま、そしてアリス以外はみんな連行（れんこう）されて、死刑の宣告をうけていたのでした。

　すると女王さまは、かなり息をきらして試合の手をとめて、アリスにこう申しました。「おまえ、にせウミガメには会ったかえ？」

「いいえ。にせウミガメってなんなのかも知りません」

「にせウミガメスープの材料になるものじゃ」と女王さま。

「見たことも、きいたこともございません」とアリス。

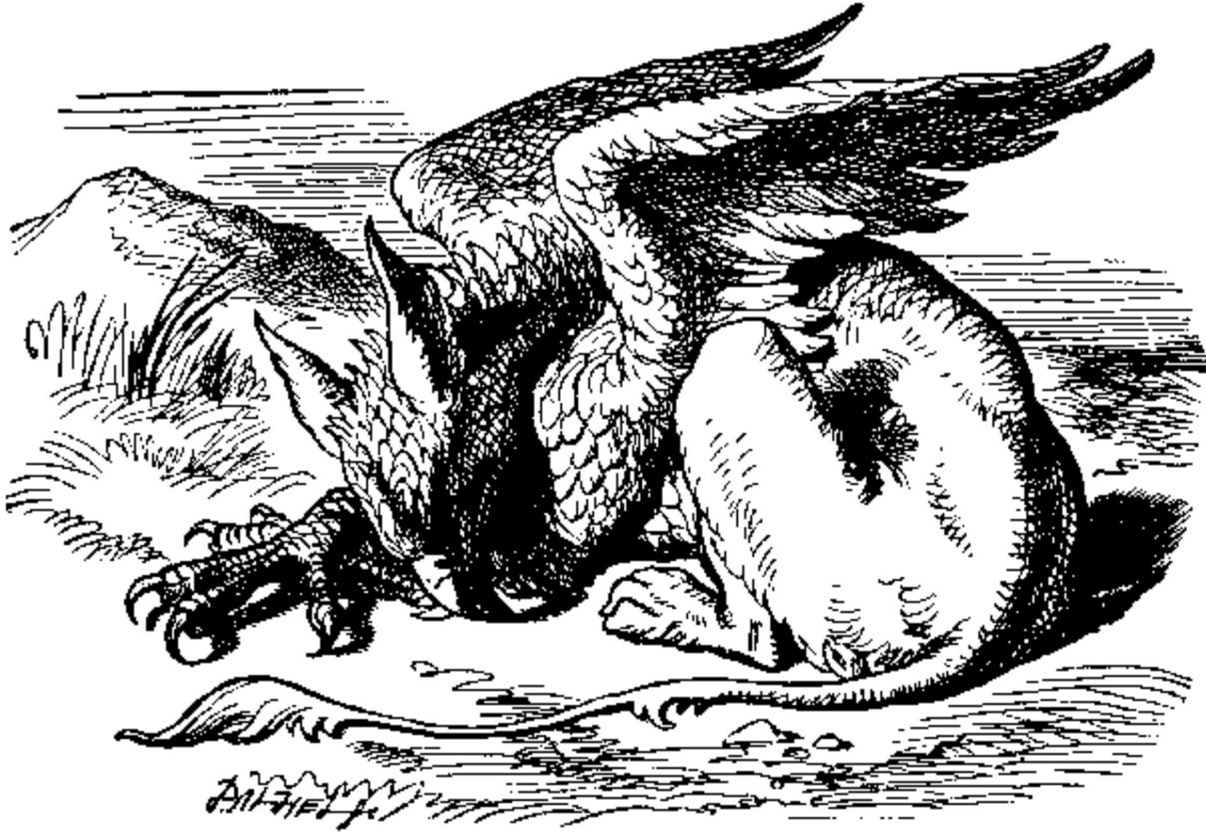
「ではおいで。あやつが身の上話をしてくれるであろう」

　二人がつれだって歩き出すと、王さまが小さな声でそこにいた全員にむかって、こうもうしわたすのが聞こえました。「みなの者、刑（けい）は免除（めんじょ）してつかわす」

「わーい、**それは**すてき！」とアリスは思いました。女王さまが命じた処刑（しょけい）が多すぎて、ずいぶんいやーな気持ちだったからです」

　まもなく、二人はグリフォンに出くわしました。ひなたぼっこをしながら、ぐっすりねむっています（**もし**グリフォンってなんだか知らなかったら、イラストを見てね。）起きんか、このぐうたらめが！」と女

王はもうします。「このわかいご婦人をつれて、にせウミガメのところであやつの身の上話をきかせてやるのじゃ。わしはもどって、めいじた処刑（しょけい）をいくつか監督せねばならんのでな」そして歩みさって、アリスとグリフォンは二人きりになりました。アリスは、この生き物のようすがあんまり気に入りませんでしたが、いろいろ考えても、あの荒（あら）っぽい女王さまについてくよりは、グリフォンといっしょのほうが安全だろうと思いました。



　グリフォンはおきあがって、目をこすりました。それから女王さまがみえなくなるまでながめて、それからくすくすわらいます。そして「たのしいねえ」と、半分自分に、半分アリスにいいました。

「たのしいって、なにが？」とアリス。

「え、**女王さん**だよ。あれってみんな、女王さんの『ごっこ』なのね。だれも処刑（しょけい）なんかされないんだよ。おいで！」

「ここじゃみんな、『おいで！』ばっかり。こんなに命令ばっかされたことってないわ、いちども！」そう思いながらも、アリスはゆっくりついていきました。

　ほどなく、にせウミガメが遠くに見えてきました。いわのちょっとしたふちのところに、かなしくさびしそうにすわっています。近くにくると、それがむねのはりさけそうなため息をついているのがきこえます。まあほんとうにかわいそう、とアリスは思いました。「なにがあんなにかなしいの？」とアリスがグリフォンにたずねますと、グリフォンはほとんどさっきと同じせりふでこたえました。「あれってみんな、あいつの『ごっこ』なのね。あいつはぜんぜんかなしくなんかないんだよ。おいで！」

　そこで二人はにせウミガメにところにやってきました。にせウミガメは、おっきな目に涙をいっぱい

うかべてこっちを見ましたが、なんにも言いません。

「このおじょうちゃんがさ、おまえの身の上話をききたいって、とかなんとか」とグリフォン。

「話してあげるわよ」とにせウミガメは、ふかくうつろな声でいいました。「二人とも、おすわんなさい。ぼくが話しおえるまで、ひとことも口きくんじゃないよ」

そこで二人はすわり、しばらくはだれもなにも言いませんでした。アリスは思いました。「話しはじめなかったら、いつまでたっても話しおえるわけないのに」でも、おとなしく待ちました。

「むかしは、ぼくもほんもののウミガメでしたのさ」にせウミガメはやっと口をひらきました。

このことばのあとには、とってもながーいだんまりがつづきました。それをやぶるのは、ときどきグリフォンのたてる「ヒジュクルル！」とかいうしゃっくりと、にせウミガメがずっとたててる、めそめそしたすすり泣きだけでした。アリスはほとんどたちあがって「ありがとうございました、とってもおもしろいお話でした」と言うところでしたが、ぜったいに**あれだけ**ってはずはないと思ったので、じっとすわってなにも言いませんでした。



やっとこさ、にせウミガメが先を話しはじめました。ちょっとは落ち着きましたが、まだときどきちょっとすすり泣いてます。「小さいころは、海中学校に行ったんですよぅ。校長先生は、おばあさんガメで——ぼくたちは、オスガメってよんでけど——」

「どうしてメスなのにオスガメなの？」とアリス。

「すが目だったからに決まってるではないの、だからおすがめ」とにせウミガメは怒ったように言いました。「あんたバカァ？©ガイナックス」

「まったくそんなかんたんなこときいたりして、恥ずかしくないのかよ」とグリフォンがつけたして、二匹ともだまってすわったまま、かわいそうなアリスを見つめましたので、アリスはこのまま地面にしずんで消えてしまいたい気分でした。ようやくグリフォンがにせウミガメに申しました。「つづけろよ、だんな。日がくれちまうぜ」そこでにせウミガメはこうつづけました。

「うん、ぼくらは、海の中の学校にいったのよ、信じないでしょうけど――」

「信じないなんて言ってないでしょう！」とアリスが口をはさみます。

「言ったね」とにせウミガメ。

「いいからだまって！」アリスが言いかえすより先に、グリフォンがわりこみました。にせウミガメがつづけます。

「最高の教育をうけてねぇ――もうまいにち学校にかよったくらいで――」

「**あたしだって**学校くらいかよったわ。そんなにじまんすることでもないでしょ」

訳者の説明：これはむかしのお話なので、学校はいまとちょっとちがう。いまはみんな学校にいくけれど、むかしはお金持ちしか学校になんかいかなかったんだ。だから学校にいった、というのはけっこうじまんできることだったんだよ。

「追加で選べる科目もあった？」とにせウミガメはちょっと不安そうにききます。

「ええ。フランス語と音楽」

「せんたくも？」とにせウミガメ。

「あるわけないでしょう！」アリスはプンプンして言いました。

「ああ、じゃああなたのは、ほんとのいい学校じゃなかったのよ」とにせウミガメは、すごくほっとしたような口ぶりです。「だって**うちの学校**では、請求書の最後んとこに『フランス語、音楽、およびせんたく――追加』ってあったもの」

訳者の説明：イギリスの学校は私立ばっかりで、毎月かそこら、学校から授業料の請求書がくるのがあたりまえだったわけ。それで、それは科目ごとにお金がとられるようになっていて、フランス語とか、音楽は、追加でお金をはらわなきゃダメだったんだよ。いまの塾（じゅく）みたいなものだと思ってね。
　ついでに言っておくと、せんたくが追加料金なのは、別にせんたくという授業があるからじゃなくて、生徒がずっと学校に寝泊まりする寄宿学校では、洗濯物を学校におねがいすることができたということ。だから請求書には、ほんとうに「せんたく」というのはあったんだけれど、でもそれは授業じゃあないんだ。

「でもおせんたくなんてあんまりいらないでしょう。だって海のそこに住んでるんだもん」

「だから選べたのよ、これがホントのせんたく科目。でもうちはお金がなくて、せんたくはとれなかったのよ。ふつう科目だけ」とにせウミガメは、ためいきまじりで言います。

「ふつう科目って？」とアリス。

「もちろんまずは、獄語と惨数ね」とにせウミガメ。「惨数もいろいろで、打算とか、安産とか、あと美化（りか）に醜怪化（しゃかいか）もね」

「『醜怪化』ってきいたことないけど、なんなの？」アリスはゆうきを出してきいてみました。

グリフォンは、びっくりして両まえ足をあげました。「なんだと！　『醜怪』をきいたことがないだと！　おまえ、さすがに『美化』のほうくらいはわかるよな？」

「ええ」とアリスは、自信なさそうにこたえました。「それは――つまり――いろんなものを――その――きれいに？――すること？」

「ふん、それがわかってるんなら、それで醜怪化（しゃかいか）がわかんないんなら、おまえって**ホンっとの**大バカもんだぞ」

それ以上はきかないほうがいいぞと思ったので、アリスはにせウミガメに言いました。「ほかにはどんなお勉強をしたの？」

「えーと、溺死（れきし）でしょ」とにせウミガメは、ひれで科目をかんじょうしていきます。「――溺死、古代死と現代死ね。それと、致死学、それから頭蓋絞殺（ずがこうさく）――絞殺の先生は、年寄りのヤツメウナギで、週に一度だけくんの。この先生は、アリバイエ作に上告（ちょうこく）がとくいだったのよぅ。出血がホントにきびしくてねぇ」

「ちゃんと出たんですか？」とアリス。

「ぼくはあんまり。ウロコが硬くて血が出にくいもん。それにグリフォンはとってないし」

「時間がなくてよ。でもおれ、惨数の上級はとったぜ。先公がすんごいタコおやじ。いやまったく」とグリフォンが言います。

「ぼくはその先生には教わってないけど」とにせウミガメがため息をつきました。「でも話によると、教えてたのが悲っ惨（ひきざん）だってねぇ」

「ああそのとおり、そのとおり」とグリフォンもためいきをついて、生き物は両方とも顔を前足でおおってしまいました。

「じゃあどういう時間割（じかんわり）になってたの？」アリスはあわてて話題を変えようとしました。

「最初の日は十コマあるのよ」とにせウミガメ。「つぎの日が五コマ、そのつぎは三コマってぐあい」

アリスはびっくりしてしまいました。「ずいぶんへんな時間割（じかんわり）ねえ！」

「え、そのまんまじゃん。時間を割ってるんだよ。日ごとに割ってくわけ」とグリフォン。

これはアリスにしてみれば、なかなか目新しいアイデアでしたので、口をひらくまえに、よっく考えてみました。「じゃあ、十日目には一コマだけだったはずね？」

「もちろんそのとおりよ」とにせウミガメ。

「じゃあ、十一日目からあとはどうしたの？」アリスはねっしんにつづけます。

でもグリフォンがきっぱりといいました。「時間割（じかんわり）はもうたくさん。こんどはこの子に、おゆうぎの話をしてやんなよ」

目次にもどる

---

10. ロブスターのカドリーユおどり

にせウミガメはふかいためいきをついて、ひれの一つで目をおおいました。そしてアリスを見て話そうとするのですが、そのたびにすすり泣きがでて、一分かそこらは声がでません。「のどに骨がつかえたときといっしょだよ」とグリフォンは、にせウミガメをゆすったり、背中をたたいたりしはじめました。やっとにせウミガメは声が出るようになって、ほっぺに涙をながしながら、またつづけました。

「あなた、海のそこにはあんまり住んだことがないかもしれないし——」（「ないわ」とアリス）——「あとロブスターに紹介されたこともないようねぇ——」（アリスは「まえに食べたことは——」と言いかけて、すぐに気がついて、「いいえ一度も」ともうしました）「——だから、ロブスターのカドリーユおどりがどんなにすてきか、もう見当もつくわけないわね！」

「ええ、ぜんぜん。どういうおどりなんですか？」とアリス。

グリフォンがいいました。「まず海岸にそって、一列になるだろ——」

「二列よ！」とにせウミガメ。「アザラシ、ウミガメ、シャケなんか。それでクラゲをぜんぶどかしてから——」

「これがえらく時間をくうんだ」とグリフォンが口をはさみます。

「——二回すすんで——」

「それぞれロブスターがパートナーね！」とグリフォンもわめきます。

「もちろん。二回すすんで、パートナーについて——」

「——ロブスターを替えて、同じように下がる」とグリフォンがつづけます。

そしてにせウミガメ。「そしたら、ほら、ロブスターを——」

「ほうりなげる！」とグリフォンがどなって、宙にとびあがりました。。

「——沖へおもいっきり——」

「あとを追っかけて泳いで！」とグリフォンぜっきょう。

「海の中でとんぼがえり！」とにせウミガメ、こうふんしてぴょんぴょんはねてます。

「またロブスターを替える！」グリフォン、ほとんどかなきり声。

「陸にもどって最初の位置にもどるのねぇ」とにせウミガメが、いきなり声をおとしました。そして生き物二匹は、さっきまで狂ったみたいにはねまわってたのに、またとってもかなしそうにしずかにすわって、アリスを見ました。

「とってもきれいなおどりみたいね」アリスはおずおずと言いました。

「ちょっと見てみたい？」とにせウミガメ。

「ええ、ぜひ」

「よーし、じゃあ最初のところ、やってみましょうか」にせウミガメがグリフォンにいいました。「ロブスターなしでもなんとかなるわね。どっちがうたう？」

「ああ、**おまえが**うたってくれよ。おれ、歌詞（かし）わすれちゃった」

そこで二匹は、まじめくさってアリスのまわりをおどりだし、ときどき近くにきすぎてアリスのつま先をふんずけて、ひょうしをとるのに前足をふって、そしてにせウミガメはこんな歌を、とってもゆっくりかなしそうにうたったのでした：

* * * * *

「『もっとさっさと歩いてよ』とスケソウダラがウミウシに。
『ヤリイカうしろにせまってて、ぼくのしっぽをふんでるの。
ロブスターとウミガメが、あんなにいそいそ進んでる！
みんな砂利浜で待ってるし——あなたもおどりに入ろうよ！

入ろう、おどろう、入ろう、おどろう、入ろう、おどろう、ぼくらのおどり
入ろう、おどろう、入ろう、おどろう、入ろう、おどろう、ぼくらのおどり

みんながぼくらをつかまえて、ロブスターと海へ投げ出す！
どんなにたのしいことなのか、あなたはたぶんわからない！』
なのにウミウシ横目でにらみ、『遠すぎ、遠すぎ！』と申します——
スケソウダラさんありがとさん、だけどおどりにゃ入りません

入らん、入れん、入らん、入れん、入らん、入れん、おどりには
入らん、入れん、入らん、入れん、入らん、入れん、おどりには

『遠くたっていいじゃない！』と、うろこの友だちこたえます。
『世界は浜辺に満ちている。こちらじゃなければあちらにも
イギリス浜からはなれるごとに、フランス浜辺に近くなる——

だからいとしいウミウシさん、青ざめないでおどろうよ。

入ろう、おどろう、入ろう、おどろう、入ろう、おどろう、ぼくらのおどり
入ろう、おどろう、入ろう、おどろう、入ろう、おどろう、ぼくらのおどり』」

* * * * *



「どうもありがとう、見っててとってもおもしろいおどりでした」アリスはそれがやっと終わってくれて、じつにホッとしました。「それにあの、スケソウダラのふうがわりな歌も、すごく気に入りました！」

「ああ、スケソウダラといえば、もちろん見たことあるのよねぇ」とにせウミガメ。

「ええ、しょっちゅう出てくるもの、ばんご――」アリスはあわてて口を閉じました。

「バンゴってどこだか知らないけど、そんなによく見かけてるなら、どんなかっこうかも知ってるわよねぇ」とにせウミガメ。

「ええたぶん。しっぽを口にくわえてて――それでパン粉まみれ」アリスは考えこんでいいました。

「パン粉はちがうわぁ。パン粉は海で洗い流されちゃうでしょ。でもたしかに、しっぽは口にくわえてるよね。なぜかというと――」ここでにせウミガメはあくびをして目をとじた。――「この子に理由とか、説明してやんなさいよぅ」とグリフォンをせっつきます。

「理由はだねえ、やつら、ロブスターと**ホントに**おどりにいくんよ。それで海にほうりなげられるだろ。だからずいぶん落っこちるわけね。それでもうしっぽをまいちゃうわけ。するとそれが口に入る。

するともう、それが出てこなくなる。おしまい」

「ありがと。それはおもしろいわね。スケソウダラのこと、こんなにはじめて知ったわ」

グリフォンが言いました。「じゃあもっと話してやろうか。なんでスケソウダラっていうか知ってる？」

「考えたことない。どうしてなの？」とアリス。

「せんたくするんだよぉ」とグリフォンは、とってもおもおもしい返事をします。

アリスはまるっきりわけがわかりません。「おせんたく、をする！」と不思議そうにくりかえすばかり。

「しょうがねえなあ、じゃああんたの服はどうあらうの？　どうやってそんな、まっ白きれいになるの？」

アリスは自分の服を見おろして、ちょっと考えてから口をひらきました。「洗剤、だと思うけど。『透明感あふれる白さです』って」

「海のそこのせんたくは、スケソウダラがやんの。『きれいすぎて、すけそうダラ（だわ）！』ってね。これで一つ、かしこくなったろう」

「でもどこでかわかすの？」アリスはすごく不思議におもってききました。

「たたみいわしの上だよう、きまってるじゃん。そこらのエビでもそんくらいは知ってるぜ」グリフォンはいささかあきれたようです。

アリスはまださっきの歌のことを考えてました。「あたしがスケソウダラなら、ヤリイカにこう言ったと思うな。『下がってくれませんか？　**あなたには**ついてきてほしくありませんの！』」

「うんたしかにヤリイカなんかぜったいにつれてかないわよねぇ」とにせウミガメ。「まともなさかななら、ヤリイカとつきあったりはしないもの」

「あら、そういうものなの？」アリスはとってもおどろいていいました。

「あたりまえだよ。もしぼくがおでかけするときに、どっかのさかながきて『おでかけですか』なんてきいたら、ぼく言っちゃうよ。『うるせーな、ヤリィカ！』って！（訳注：うるさいうるさい、苦しいのはわかってるんでぃ！）」

「……それって『わりぃか』ってこと？」とアリス。

「ぼくがそうだと言ったらそうなのよ」とにせウミガメは、ちょっとむっとした口ぶりで言いました。そしてグリフォンがつづけます。「さあ、**あんたの**冒険をちょっときかせてもらおうじゃないの」

「あたしの冒険っていうと――けさからのなら話してあげられるけど」アリスはちょっとおずおずと言いました。「でもきのうまでもどってもしかたないわ、だってそのころはあたし、別の人だったから」

「いまの、なんのこったか説明しなさい」とにせウミガメ。

グリフォンがうずうずして言います。「だめだめ、冒険が先。説明ってのは、ありゃえらく時間がかかるんだ」

そこでアリスは、白うさぎを見たところから自分の冒険の話をはじめました。最初はちょっと不安でした。だって二匹の生き物がすっごく近くによってきて、アリスの左右について、お目目とお口を**すんごく**ひらいていたからです。でも、先にすすむうちに、ゆうきが出てきました。きき手はずっとなにも言いませんでしたが、いもむしに『ウィリアム父さんお歳をめして』を暗唱して、ことばがぜんぶちがって出てきたところにくると、にせウミガメが思いっきり息をすいこんで言いました。「それはじつにおもしろいわぁ」

「うん、なにもかもすっごくおもしろい」とグリフォン。

「ぜんぶちがって出てきたのねぇ」とにせウミガメは考えこんでくりかえします。「ぼく、この子がここでなにか暗唱するのをきいてみたいわ。やれって言ってやってよ」とにせウミガメはグリフォンのほうを見ました。まるでグリフォンがアリスに命令する力があるとでも思ってるみたいです。

「立って『不精者（ぶしょうもの）の宣言』を復唱するんだ」とグリフォン。

「まったくここの生き物って、人に命令してばかりで、お勉強の復習ばかりさせるんだから。いますぐ学校にもどったほうがましかも」でもアリスは立ちあがって復唱をはじめました。でも頭がロブスターのカドリーユおどりでいっぱいだったので、自分がなにを言ってるのかまるでわからず、おかげでことばもずいぶんへんてこになっちゃったのです。

*　　*　　*　　*　　*



「ロブスターの宣言を、わたしが聞いたところでは
『わしはこんがり焼かれすぎ、髪に砂糖をまぶさなきゃ』
アヒルがまぶたでするように、ロブスターは鼻ヅラで
ベルトとボタンを整えて、つま先そとに向けまする」

「砂がすっかりかわいたら、ヒバリまがいに大ごきげん
サメを小ばかにしてまわる
でも潮がみちてサメがくりゃ
声はおびえてふるえます。」

* * * * *

「おれが子どものころに暗唱したのとは、ちがってるなあ」とグリフォン。

「うん、ぼくははじめてきくけど、でもわけわからないデタラメにしかきこえないわよ」とにせウミガメ。

アリスはなにも言いませんでした。すわって、顔を両手でおおって、もうこの先**二度と**、なにもふつうにはおきないのかしら、と考えていました。

「説明してもらえないかしらぁ」とにせウミガメ。

「説明できないよ、この子」とグリフォンがいそいで言います。「つぎんとこ、やってごらん」

「でもつま先はどうなるのぉ？　だってロブスターが、**どうやったら**それを鼻でそとに向けるのぉ、ねえ？」

「おどりの最初のポジションよ」とアリスは言いました。が、なにもかもとんでもなく頭がこんがらがっていて、話題を変えたくてしかたありませんでした。

「つぎんとこ、やってごらん」グリフォンが、まちきれないようすで言いました。「出だしは『とおりすがりにそいつの庭で』だよ」

アリスはとてもさからったりできませんでしたが、でもぜったいにぜんぶめちゃくちゃになるな、と思ったので、ふるえる声でつづけました：

* * * * *

「とおりすがりにそいつの庭で、わたしが片目で見たことにゃ
ヒョウとオウムがパイをわけ——
ヒョウがたべたはパイ皮、肉汁と肉
オウムの分け前、お皿だけ。

パイがおわるとおなさけに
オウムはおさじをもちかえり
ヒョウはうなってナイフとフォーク
夕餉（ゆうげ）のしめは、あわれな——」

*　　*　　*　　*　　*

「こんなの暗唱してもらってどうしろってゆーの？」とにせウミガメが口をはさみます。「とちゅうで説明してくれなきゃ！　ぼくがこれまで聞いた中で、一番わけわからんしろものだわ！」

「うん、そのくらいにしとこうね」とグリフォンが言って、アリスはよろこんでそれにしたがいました。

グリフォンがつづけます。「ロブスターのカドリーユおどりを、べつのやりかたでやろうか？　それともにせウミガメに歌をうたってほしい？」

「ああ、歌がいいです、おねがい、にせウミガメさんさえよろしければ」アリスのへんじがあまりに熱心だったので、グリフォンはちょっと気を悪くしたようです。「ふん、まあいろんなしゅみの人がいるからね！　おいだんな、この子に『ウミガメスープ』をうたってやってくんない？」

にせウミガメはふかいためいきをつくと、ときどきすすり泣きでつっかえる声で、こんな歌をうたいだしました：

*　　*　　*　　*　　*

「みごとなスープ、みどりのどろどろ
あつあつおなべでまっている！
だれでものりだすすてきな美食！
ゆうべのスープ、みごとなスープ
ゆうべのスープ、みごとなスープ
みぃぃごとぉなスゥゥゥプ！
みぃぃごとぉなスゥゥゥプ！
ゆぅぅぅべのスゥゥゥプゥ！
みごとなみごとなスープ！」

「みごとなスープ！
さかなもおにくもサラダもいらぬ！
二ペンスほどのみごとなスープ
でだれもがすべてをなげだしましょう！
みごとなスープが一ペンス！
みぃぃごとぉなスゥゥゥプ！
みぃぃごとぉなスゥゥゥプ！
ゆぅぅぅべのスゥゥゥプゥ！
みごとなみぃごとなスゥゥ**ウゥプ**！」

*　　*　　*　　*　　*

「さあ、サビをもう一度！」とグリフォンがさけんで、にせウミガメがちょうどそれをくりかえしはじめたとき、遠くのほうで「裁判がはじまるぞ！」とさけびがきこえました。

「おいで！」とグリフォンは、アリスの手をひいて、歌の終わりをまたないで、かけだしました。

「なんの裁判なの？」アリスはきれぎれの息でききました。でもグリフォンは「おいで！」と言うだけ

でもっとはやく走りだして、にせウミガメのかなしそうな声は、背中からのそよ風にのって、ますますかすかにきこえてくるだけとなりました：——

「ゆぅぅぅべのスゥゥウプゥ
みごとなみごとなスープ！」

目次にもどる

---

11. タルトをぬすんだのはだれ？



ハートの王さまと女王さまは、ついたときには玉座にすわっていました。そのまわりには、大群衆が集まっています——いろんな小さな鳥や動物、さらにはトランプひとそろい。ジャックが王さまたちの前でくさりにつながれていて、その両側に兵隊さんがついています。そして王さまの近くには、白うさぎがいて、片手にラッパ、片手に羊皮紙（ようひし）のまきものをもっています。法廷のまん中にはテーブルがあって、タルトののったおっきなお皿がありました。すごくおいしそうだったので、アリスは見ているだけでおなかがすいてきました——「はやいとこ裁判をすませて、おやつをくばってくれないかな！」でもこれはありそうになかったので、ひまつぶしにアリスはまわりのものをなにもかも見ていきました。

裁判所にくるのははじめてでしたが、本でよんだことはあったので、ほとんどなんでも名前がわかってアリスはとてもとくいでした。「あれが判事ね、おっきなかつらをかぶってるもの」

ちなみにその判事というのは、王さまでした。そしてかつらの上から王冠をかぶっていたので（どんなぐあいだったか見たければ、この本の最初にある口絵を見てね）、あまり落ち着かなそうで、それがよくなりそうなようすもありませんでした。

「そしてあれば陪審席（ばいしんせき）。そしてそこにいる十二匹の生き物だけど」（生き物っていうしかなかったんだ、動物もいれば鳥もいたから）「あれがたぶん、陪審員（ばいしんいん）ね」アリスはこの最後のことばを、二三回くりかえしました。ちょっと得意だったのです。だって、こんなに小さくてこんなことばの意味をぜんぶ知ってるなんて、あんまりいないはずだと思ったからで、それはそのとおりでした。でも、ただの「陪審（ばいしん）」でもぜんぜんかまわなかったのですけどね。

陪審員（ばいしんいん）12人たちは、みんな石板にいそがしくなにか書きつけています。「あれはなにをしてるの？　裁判がはじまってないんだから、なにも書くことないはずでしょう」とアリスはグリフォンにささやきました。

「自分の名前を書いてんの。裁判が終わるまでにわすれちゃうとこわいと思ってるんだよ」とグリフォンがささやきかえします。

「馬鹿（ばか）な連中！」とアリスはおっきなけいべつするような声をあげましたが、すぐにやめました。白うさぎが「せいしゅくに！」とさけんだからです。王さまはめがねをかけて心配そうにあたりを見まわし、だれがしゃべっているのかを見ようとします。

アリスは、陪審員（ばいしんいん）たちが「馬鹿（ばか）な連中！」と書きとめたのがわかりました。まるでそのかたごしに見ているかのようです。なかの一人が「馬鹿（ばか）」と書けなくて、となりにきいているのもわかりました。「裁判が終わるまでに、あの石板はまるでわけわからなくなるだろうなあ」とアリスは思いました。

陪審員（ばいしんいん）たちの一人が、きしる石筆を使っていました。もちろんアリスは、これががまんできなかったので、法廷をぐるっとまわってそいつのうしろにくると、じきにすきを見つけて、その石筆をとりあげてしまいました。とってもすばやくやったので、かわいそうな陪審員（ばいしんいん）さん（それはあのトカゲのビルでした）はいったいなにがおきたのか、さっぱりわかりませんでした。そこらじゅうをさがしまわったあげくに、その日はずっと、指で書くしかありませんで、これはまったくなんの役にもたちません。石板になんのしるしものこさなかったからです。

「告知官（こくちかん）、訴状（そじょう）を読み上げるがよい！」と王さま。

これをうけて、白うさぎはラッパを三回ふきならすと、羊皮紙（ようひし）のまきものをひらいて、こんなものをよみあげました：

*　　*　　*　　*　　*

「ハートの女王、タルトをつくる
ある夏の日に

ハートのジャック、タルトを盗み
一つのこらずかっさらう！」

*　　*　　*　　*　　*

「では判決をまとめるがよい」と王さまは陪審に言いました。

「まだです、まだです！」うさぎがあわてて止めます。「それより先に、たくさんやることがあります！」

「最初の証人をよべ」と王さま。そして白うさぎがラッパを三回ふきならして、さけびました。「証人だい一号！」

最初の証人は、あの帽子屋さんでした。片手にお茶わん、片手にバターパンをもっています。「国王陛下、こんなものをもってきやして、すまんこってす。でもよばれたときに、まだお茶がすんでなかったもんでして」



「すんでいたはずだが」と王さま。「いつからはじめた？」

帽子屋さんは三月うさぎのほうを見ました。三月うさぎは、ヤマネとうでをくんで、あとからついてきたのです。「**たしか**三月の十四日だった、と思うけど」

「十五だよ」と三月うさぎ。

「十六」とヤマネ。

「書いておけ」と王さまは陪審にいいました。そして陪審員は、ねっしんに、石板に日づけを三つとも書いて、それからそれを足して、そのこたえをこんどはシリングとペンスになおします。

「帽子をとりなさい」と王さまが帽子屋さんにもうします。

「こいつぁあっしのもんじゃございませんで」と帽子屋さん。

「**ぬすんだな！**」と王さまはさけび、陪審のほうを見ると、みんなすぐにそのじじつをメモします。

「こいつぁ売りものでさぁ。自分の帽子なんかもってませんや。なんせ帽子屋、ですからね」と帽子屋さんは説明します。

ここで女王さまがめがねをかけて、帽子屋さんをじっとながめました。ながめられた帽子屋さんは、青ざめてヒクヒクみぶるいしてます。

「証言をするがよい。それと、そうビクビクするな、さもないとこの場で処刑させるぞ」

こういわれても、証人はちっともげんきになりません。あいかわらずもじもじしながら、おどおどと女王さまのほうを見て、混乱しすぎてバターパンのかわりにお茶わんのほうをかじってしまいました。

ちょうどこのとき、アリスはとっても変な気分になりました。いったいなんだろうとずいぶん首をかしげたのですが、やがてなんだかわかりました。またおっきくなりだしてるのです。最初は、立ってここを出ようかと思いました。でもやっぱり考え直して、い場所があるうちはここにいようと決めました。

「そんなぎゅうぎゅう押すなよぅ。息ができないよぅ」ととなりにすわってたヤマネがいいました。

「しょうがないでしょう。おっきくなってるんだから」とアリスはとってもよわよわしくいいました。

「なにも**こんなところで**おっきくならなくても」とヤマネ。

「バカなこといわないでよ。あなただって、おっきくそだってるんですからね」アリスはもうちょっと強くいいました。

「うん、でも**ぼくは**ふつうにおっきくなってるんだからね。そんなとんでもないはやさじゃないよ」そしてヤマネは、プンプン怒って立ちあがると、法廷をよこぎって反対側にいってしまいました。

この間ずっと、女王さまは帽子屋を見つめるのをやめませんで、ヤマネが法廷をよこぎったと同時に廷吏の一人に申します。「前回のコンサートの歌い手一覧をもってまいれ！」これをきいて、ひさんな帽子屋さんはガタガタふるえすぎて、くつが両方ともゆすりぬげてしまいました。

「おまえの証言をのべよ」と王さまは怒ったようにいいます。「さもないと、ビクビクしているかにかんけいなく、おまえを処刑させるぞ」

「あっしは貧しいものでして、国王陛下」と帽子屋さんはふるえる声できりだしました。「——そしてお茶もまだで——もう一週間ほどもなんですが——んでもって、バターパンもこんな心もとなくなってきて——それでキラキラの木が——」

「キラキラの**なんと**もうした？」と王さま。

「ですから木からはじまったんでして」と帽子屋さんはこたえます。

「キラキラがキで**はじまっておる**のはとうぜんであろうが！」と王さまはきびしく申しわたします。「わしをそこまでうつけ者と思うか！　つづけよ！」

「あっしぁ貧しいもんでして」と帽子屋さんはつづけます。「でもって、それからはなんでもキラキラで――でも三月うさぎが言いますに――」

「言ってない！」と三月うさぎがあわててわりこみます。

「言った！」と帽子屋さん。

「否認します！」と三月うさぎ。

「否認しておる。その部分は除外するように」と王さま。

「まあとにかく、ヤマネが言いまして――」と帽子屋さんはつづけてから、不安そうに首をまわして、ヤマネも否認するかどうか心配そうにながめました。が、ヤマネはぐっすりねむっていたので、なにも否認しませんでした。

「それから、あっしはもっとバターパンを切って――」と帽子屋さん。

「でもヤマネはいったいなんと言ったんですか？」と陪審の一人がききました。

「それは思い出せません」と帽子屋さん。

「**なんとしても**思いだすのじゃ。さもないと処刑するぞ」と王さま。

みじめな帽子屋さんは、お茶わんとバターパンをおとして、片ひざをついちゃいました。「あっしは貧しいんです、国王陛下」と帽子屋さんは口を開きます。

「はつげんのなかみは、**たしかに**貧しいな」と王さま。

ここでモルモットが一匹、かんせいをあげて、すぐに廷吏（ていり）に鎮圧（ちんあつ）されました。（これはちょっとむずかしいことばなので、どういうふうにやったか説明しようね。おっきなずだぶくろがあって、口にひもがついていてしばれるようになってるんだけど、モルモットはそこに頭からおしこまれて、そしてみんなでその上にすわっちゃうんだ）。

「いまのは見られてよかったな。よく新聞で、裁判の終わりに『拍手があがりかけたが、廷吏（ていり）によってそくざに鎮圧（ちんあつ）された』ってかいてあるのをよく見かけるけれど、いままでなんのことかぜんぜんわからなかったもん」とアリスは思いました。

「それで知ってることのすべてなら、下がってよいぞ」と王さまがつづけました。

「これ以上はさがれませんや、うしろに柵があるもんで」と帽子屋さん。

「では**すわるが**よい」と王さまがこたえます。

ここでモルモットがもう一匹かんせいをあげて、鎮圧（ちんあつ）されました。

「わーい、あれでモルモットはおしまいね。これでちょっとましになるかな」とアリスは思いました。

「それよりお茶をすませたいんで」と帽子屋さんが女王さまを心配そうに見ると、うたい手のいちらん表をよんでいるではありませんか。

「いってよし」と王さまがいうと、帽子屋はあわてて法廷から出ていって、くつをはくことさえしませんでした。



「――そしてあやつの頭を外ではねておしまい」と女王は廷吏(ていり)の一人に言い足しました。でも帽子屋さんは、その廷吏(ていり)がとびらにつくより先に、すがたを消してしまいました。

「つぎの証人をよべ！」と王さま。

つぎの証人は公爵夫人のコックでした。手にはコショウのはこをもっていて、とびら近くの人がいっせいにくしゃみをはじめたので、アリスはそれがだれだか、法廷に入ってくる前から見当がつきました。

「証言をのべよ」と王さま。

「やだ」とコック。

王さまは心ぼそげに白うさぎを見ました。白うさぎは小声でもうします。「陛下、**この証人を**反対尋問(はんたいじんもん)しなくてはなりませんぞ！」

「まあどうしてもというのなら、しかたあるまい」と王さまはゆううつそうなようすで言いました。そしてうで組みして、コックにむかってしかめっつらするうちに、目玉がほとんど見えなくなってしまって、

そしてふかい声でいいました。「タルトはなにでできておるかな？」

「コショウ、ほとんど」とコック。

「とうみつ」とねむたい声がうしろでしました。

女王さまがかなきり声をあげます。「あのヤマネをふんじばれ！　ヤマネの首をちょん切れ！　法廷からたたき出せ！　ちんあつしろ！　つねれ！　ヒゲをちょん切れ！」

しばらくは、法廷ぜんたいがヤマネをおいだすので、混乱しきっていました。そしてそれがおちついたころには、コックは消えていました。

「まあよい」と王さまは、いかにもホッとしたようすでもうしました。「つぎの証人をよんでまいれ」そして小声で女王さまにいいました。「まったくおまえ、こんどの証人は**おまえが**反対尋問（はんたいじんもん）しておくれ。まったくわしゃ頭痛（ずつう）がしてきた！」

白うさぎがいちらん表をもたもたひらくのをながめながら、つぎの証人はどんな生き物かなと、アリスはまちどおしくてたまりませんでした。「——だってこれまではたいしたしょうこは**まだ**出てきてないんですもん」とアリスはつぶやきました。白うさぎが小さなかんだかい声をめいっぱいはりあげて、つぎの証人の名前を呼んだときに、この子がどんなにおどろいたか、想像できますか？　白うさぎのよんだ名前は：「アリス！」

目次にもどる

---

12. アリスのしょうこ



「ここです！」とアリスは声をあげ、いっしゅんこうふんしてここ数分で自分がどれほど大きくなったかをすっかりわすれ、あわてて立ち上がりすぎて、陪審席をスカートのはしにひっかけてたおしてしまい、おかげで陪審たちがその下のぼうちょう席に、頭から浴びせられることになってしまいました。そしてみんなベシャッと横になって、アリスは先週うっかりひっくりかえした金魚鉢のようすを、まざまざと思いだしました。

「あら**ほんとうに**ごめんなさい！」アリスはうろたえてさけび、できるだけすばやくみんなをひろいあげました。金魚鉢の事故が頭のなかをかけめぐって、なんだかすぐにあつめて陪審席にもどしてあげないと、みんなすぐに死んじゃうような気がばくぜんとしたのです。

王さまがとてもおもおもしい声でもうします。「陪審員が全員しかるべきいちにもどらないかぎり、裁判をすすめることはできない――**全員**、だぞ」と、とても強くくりかえしながら、アリスをにらみつけます。

陪審席をみてみると、あわてていたせいで、トカゲをさかさにつっこんでしまったのがわかりました。かわいそうなトカゲはかなしそうにしっぽをふって、まるでみうごきができずにいたのです。すぐに出してあげて、ちゃんともどしてあげました。「でもべつにたいしたちがいじゃないと思うけれど。あのトカゲなら、さかさだろうと裁判にはまるっきりえいきょうしないと思う」とアリスは考えます。

陪審たちが、ひっくりかえされたショックからすこし立ちなおり、石板と石筆がみつかってかえされると、みんなすぐにこの事故のけいかを、こまごまと書きつけはじめました。ただしトカゲだけはべつです。トカゲはショックがつよすぎて、口をぽかーんとあけて法廷の屋根を見あげながら、すわっているだけでした。

「このいっけんについて、なにを知っておるかね？」王さまはアリスにききました。

「なんにも」とアリス。

「なにも**まったく**？」と王さまがねんをおします。

「なにも**まったく**」とアリス。

「これはきわめて重要（じゅうよう）じゃ」と王さまはばいしんにむかって言いました。ばいしんたちがこれを石板に書き始めたところで、白うさぎが口をはさみます。「**非**重要（ひじゅうよう）と、もちろん王さまはいわんとしたのです」その口ぶりはとってもそんけいがこもっていましたが、でも言いながら王さまにむかって、しかめっつらをして変な顔をしてみせています。

「**非**重要（ひじゅうよう）じゃ、もちろんわしのいわんとしたのは」と王さまはあわてて言いました。そしてそのあとで「重要（じゅうよう）——非重要（ひじゅうよう）——重要（じゅうよう）——非重要（ひじゅうよう）——」と小声でぶつぶつつぶやいて、どっちのことばがしっくりくるかを決めようとしてるみたいでした。

陪審（ばいしん）のなかには「重要（じゅうよう）」と書いたのもいたし、「非重要（ひじゅうよう）」と書いたのもいました。アリスは石板をのぞきこめるくらい近くにいたのです。「でもどうだっていいや」と思いました。

このとき、しばらくノートにいろいろねっしんに書きつけていた王さまが「せいしゅくに！」とかなきり声をあげて、ほうりつ書をよみあげました。「規則だい四十二番。身のたけ1キロ以上のものは、すべて法廷を出なくてはならない」

みんなアリスのほうを見ました。

「あたし、身長一キロもないもん！」とアリス。

「あるね」と王さま。

「二キロ近くあるね」と女王さま。

「ふん、どっちにしても、あたしは出ていきませんからね。それに、いまのはちゃんとした規則じゃないわ。いまでっちあげただけでしょう」

「ほうりつ書で一番ふるい規則じゃ」と王さま。

「だったら規則一番のはずだわ」とアリス。

王さまはまっさおになり、ノートをあわててとじました。そして陪審にむかって小さなふるえる声で「判決を考えるがよい」ともうしました。

「まだしょうこが出てまいります、おねがいですから陛下」と白うさぎがあわてて飛び上がりました。「ちょうどこのかみきれが手に入りましたのです」

「なにが書いてあるのじゃ？」と女王さま。

「まだあけておりませんで」と白うさぎ。「でもなにやら手紙のようで。囚人が書いたもののようです——だれかにあてて」

「そうだったにちがいない。ただし、だれにもあてていないかもしれないぞ、めったにないことではあるがな」と王さま。

「だれあて？」と陪審の一人。

「あて先がまったくないのです。じつは、**外側には**なにも書かれていないのです」こういいながら、白うさぎはかみをひらいて、つけたしました。「やっぱり手紙ではありませんでした。詩です」

「囚人の筆跡かい？」とべつの陪審がききます。

「それがちがうのです。一番なぞめいた部分ですな」と白うさぎ。（陪審たちはみんな、ふしんそうな顔をします。）

「だれか別人の筆跡をまねたにちがいない」と王さま（陪審たちはみんな、顔がパッとあかるくなりました）。

「おねがいです、陛下。わたしは書いておりませんし、だれもわたしが書いたとは証明できないはずです。最後にしょめいもないじゃないですか」とジャック。

「しょめいしなかったのなら、なおわるい。きさまはまちがいなくなにかをたくらんでおったろう。さもなければ、正直者としてちゃんとしょめいをしたであろうからな！」と王さま。

これにはあちこちではくしゅがおこりました。この日、王さまが言ったはじめての、まともにかしこいことだったからです。

「これであやつの**ゆうざいが**証明された」と女王さま。

「ぜんぜんそんな証明にはならないわ！」とアリス。「だいたいみんな、なにが書いてあるかもまだ知らないくせに！」

「読むがよい」と王さま。

白うさぎはめがねをかけます。「どこからはじめましょうか、陛下？」

王さまはおもおもしくもうします。「はじめからはじめるがよい。そして最後にくるまでつづけるのじゃ。そうしたらとまれ」

白うさぎが読みあげた詩は、こんなものでした：

*　　*　　*　　*　　*

「きみが彼女のところへいって、
　ぼくのことを彼に話したときいた：
　彼女はぼくをほめてはくれたが、
　ぼくが泳げないといった。

彼はみんなにぼくが去っていないと報せた
（これが事実なのはわかっている）：
彼女がこの件を追求したら、
きみはいったいどうなる？

ぼくは彼女に一つやり、みんなはかれに二つやり、
きみはぼくらに三つ以上くれた：
みんな彼からきみへもどった、
かつてはみんなぼくのだったのに。

もしぼくか彼女がたまさか
この事件に巻き込まれたら
彼はきみにかれらを解放してくれという、
ちょうどむかしのぼくらのように。

ぼくの考えではきみこそが
　（彼女がこのかんしゃくを起こす前は）
彼とわれわれとそれとの間に
割って入った障害だったのだ。

彼女がかれらを一番気に入っていたと彼に悟られるな
というのもこれは永遠の秘密、
ほかのだれも知らない、
きみとぼくだけの秘密だから」

* * * * *

「これまできいたなかで、もっとも重要なしょうこぶっけんじゃ」と王さまは、手もみしながらもうします。「では陪審は判決を——」



「あのなかのだれでも、いまの詩を説明できるもんなら、六ペンスあげるわよ」(アリスはこの数分ですごく大きくなったので、王さまの話をさえぎっても、ちっともこわくなかったんだ)「**あたしは**あんな詩、これっぽっちも意味はないと思うわ」

陪審(ばいしん)はみんな、石板に書きつけました。「**この女性は**あんな詩、これっぽっちも意味はないと思う」でもだれもそれを説明しようとはしません。

「これっぽっちも意味がないなら、いろいろてまがはぶけてこうつごうじゃ、意味をさがすまでもないんじゃからの。しかしどうかな」と王さまは、詩をひざのうえにひろげ、かた目でながめてつづけます。「どうもなにかしら意味はよみとれるように思うんじゃがの。『——**泳げないといった**——』おまえ、泳げないじゃろ?」と王さまはジャックのほうをむきます。

ジャックはかなしそうに首をふりました。「泳げそうに見えます?」(たしかに見えなかったね、ぜんしんがボールがみでできていたもの)。

「いまのところはよいようじゃな」と王さまは、詩をぶつぶつつぶやきながら、先をつづけます。「『これが事実なのはわかってる』——これはもちろん陪審じゃな——『ぼくは彼女に一つやり、みんなはかれに二つやり』——なんと、これはこやつがタルトでしでかしたことではないか——」

「でも、『みんな彼からきみへもどった』ってつづいてるじゃないの」とアリス。

「ほうれ、そこにもどっておるではないか!」と王さまは勝ちほこって、テーブルのタルトを指さしました。「**明々白々**ではないか。しかし——『彼女がこのかんしゃくを起こす前』とは——つまよ、おま

えは**かんしゃく**など起こしたことはないと思うが？」と王さまは女王さまにもうしました。

「一度もないわ！」と女王は怒り狂って、あわせてインクスタンドをトカゲに投げつけました。（かわいそうなビルは、あれから一本指で石板に書くのをあきらめていました。なんのあともつかなかったからです。でもいまや急いでまた書きはじめました。自分の頭をつたいおちてくるインキを、なくなるまで使ったのです）

「ではこの詩があてはまらなくて**かんしゃ**（く）しよう」といって王さまは、にっこりと法廷を見まわしました。あたりはしーんとしています。

「しゃれじゃ！」と王さまが、むっとしたようにつけたしますと、みんなわらいました。「では陪審は判決を考えるように」と王さまが言います。もうこれで二十回目くらいです。

「ちがうちがう！　まずは処刑――判決はあとじゃ！」と女王さま。

「ばかげてるにもほどがある！」とアリスが大声でいいました。「処刑を先にするなんて！」

「口をつつしみおろう！」女王さまは、むらさき色になっちゃってます。

「いやよ！」とアリス。

「あやつの首をちょん切れ！」女王さまは、声をからしてさけびます。だれも身動きしません。

「だれがあんたたちなんか気にするもんですか！」とアリス（このときには、もう完全にもとの大きさにもどってたんだ）「ただのトランプの束のくせに！」



これと同時に、トランプすべてが宙にまいあがって、アリスのうえにとびかかってきました。アリスはちょっとひめいをあげて、半分こわくて半分怒って、それをはらいのけようとして、気がつくと川辺によこになって、おねえさんのひざに頭をのせているのでした。そしておねえさんは、木からアリスの顔にひらひら落ちてきた枯れ葉を、やさしくはらいのけているところでした。

「おきなさい、アリスちゃん！　まったく、ずいぶんよくねてたのね！」

「ね、すっごくへんな夢を見たの！」とアリスはおねえさんに言って、あなたがこれまで読んできた、この不思議な冒険を、おもいだせるかぎり話してあげたのでした。そしてアリスの話がおわると、おねえさんはアリスにキスして言いました。「それは**とっても**ふうがわりな夢だったわねえ、ええ。でもそろそろ走ってお茶にいってらっしゃい。もう時間もおそいし」そこでアリスは立ちあがってかけだし、走りながらも、なんてすてきな夢だったんだろう、と心から思うのでした。

でもおねえさんは、アリスがいってしまってからも、じっとすわってほおづえをつきながら、夕日をながめつつアリスとそのすばらしい冒険のことを考えておりました。するとやがておねえさんも、なんとなく夢を見たのです。そしておねえさんの夢は、こんなぐあいでした。

まず、おねえさんは小さなアリス自身のことを夢に見ました。そしてさっきと同じように、小さな手がこちらのひざのうえでにぎりしめられ、そして明るいいきいきとした目が、こちらの目をのぞきこんでいます――アリスの声がまざまざときこえ、いつも目にかぶさるおちつかないあのかみの毛を、へんなふり方で後ろに投げ出すあのしぐさも見えます――そしてそれをきくうちに、というかきいているつもりになるうちに、おねえさんのまわりがすべて、妹の夢の不思議な生き物にいのちをふきこむのでした。

白うさぎが急ぐと、足もとで長い草がカサカサ音をたてます――おびえたネズミが近くの池の水をはねちらかして――三月うさぎとそのお友だちが、はてしない食事をともにしているお茶わんのガチャガチャいう音が聞こえます。そして運のわるいお客たちを処刑しろとめいじる、女王さまのかなきり声――またもやぶた赤ちゃんが公爵夫人のひざでくしゃみをして、まわりには大皿小皿がガシャンガシャンとふりそそいでいます――またもやグリフォンがわめき、トカゲの石筆がきしり、鎮圧されたモルモットが息をつまらせる音があたりをみたし、それがかなたのみじめなにせウミガメのすすり泣きにまじります。

そこでおねえさんはすわりつづけました。目をとじて、そして自分が不思議の国にいるのだと、なかば信じようとしました。でも、いずれまた目をあけなくてはならないのはわかっていました。そしてそうなれば、まわりのすべてがつまらない現実にもどってしまうことも――草がカサカサいうのは、風がふいているだけだし、池はあしがゆれて水がはねているだけ――ガチャガチャいうお茶わんは、ヒツジのベルの音にかわり、女王さまのかなきり声は、ヒツジかいの男の子の声に――そして赤ちゃんのくしゃみ、グリフォンのわめきなど、いろんな不思議な音は、あわただしい農場の、いりまじったそう音にかわってしまう（おねえさんにはわかっていたんだ）――そして遠くでいななくウシの声が、にせウミガメのすすり泣きにとってかわることでしょう。

最後におねえさんは想像してみました。この自分の小さな妹が、いずれりっぱな女性に育つところを。そして大きくなってからも、子ども時代の素朴で愛しい心をわすれずにいるところを。そして、自分の小さな子どもたちをまわりにあつめ、数々の不思議なお話で**その子たちの**目を、いきいきとかがやかせるところを。そのお話には、ずっとむかしの不思議の国の夢だって入っているかもしれま

せん。そして素朴なかなしみをわかちあい、素朴なよろこびをいつくしみ、自分の子ども時代を、そしてこのしあわせな夏の日々も、わすれずにいるところを。

目次にもどる

訳したやつのいろんな言い訳

いやあ、ほかならぬこの本について、いまさら何かぼくがつけくわえることがあるかね？　まあいちおう、さくしゃともとの本のことは書いておこうか。

*　*　*　*　*

*　*　*　*

*　*　*　*　*

この本を書いたのは、ルイス・キャロルという人だけれど、これはペンネーム。本名はチャールズ・L・ドジソンといって、十九世紀の前半くらいにイギリスの数学の先生だった人だ。この人は、ロリコンのへんたいで、ちっちゃな女の子をはだかにして写真をとるのがだいすきだった。いまならカメラこぞうとかいわれる人になったかもしれないね。

このお話は、1832年に出版された。もとは近所の三人姉妹の女の子たちにせがまれて、ドジソン先生がその場の思いつきででっちあげたお話だ。アリスというのも、その女の子たちの一人。一番下の妹だった。お話のなかに出てくる「ダイナ」というねこも、この子たちがほんとうに飼っていたねこの名前なんだって。それがおもしろかったので、そのまま本にして出した。その後、ちょっと書き直したところもあるらしいけれど、まあほとんど変わっていない。それがベストセラーになって大評判になって……そしていままでつづいている。

それともう一つ、このお話にとって決定的だったのが、ここにも入れたイラストだ。ルイス・キャロルは「アリス」をちょっと書き直している、とさっき書いた。何度めかの書き直しで出版したときに、イラストを描いたのがジョン・テニエルという人だ。そして人がかいたこのイラストは、どういうわけかアリスという子のイメージを完全にきめてしまった。じつはこのアリス、じっさいにこのお話を最初にきいた、三人姉妹のアリス（つまりほんとのモデル）とはぜんぜん似ていないんだって。でも世界中の人が、「アリス」といって思いうかべるのは、このイラストのイメージだ。ちがったイラストをつけようとした人もいっぱいいる。でも、テニエルをしのぐものは一つもない（足もとに及ぶものさえない）。ディズニーがこれをアニメにしたんだけれど、そのときもこのテニエルの絵に完全にえいきょうされているし、金子国義という日本でちょっと有名な画家が、アリスが大好きで自訳自挿画のアリス本を先日出したんだけれど、そのイラストもテニエルの呪縛からは逃れられていない。

*　*　*　*　*

*　*　*　*

*　*　*　*　*

もともと子ども向けのお話ではあるんだけれど、このお話はなんだかみょうに、おとなたちに人気

が出ちゃった。この「アリス」をつつきまわしていろんな出まかせや思いつきをいう人はたくさんいる。まあ出まかせやおもいつきにも、おもしろいの、つまんないのといろいろある。

たとえばぼくたちのいるこの宇宙は、どんどんふくらんでいることがわかっているんだけれど、このお話でアリスがのびたりちぢんだりするのは、その宇宙のぼうちょうと似てるじゃないか、とかね。こういうたとえばなしは、人によってはおもしろいな。

あと、大人になると、人間はとてもエッチになるので、のびたりちぢんだりというとみんなすぐにおちんちんのことを考えちゃうのだ(ああ、大人のおちんちんはのびたりちぢんだりするんだ。でも、みんなそれをはずかしいことだと思っているので、お父さんとかにきいたりしないほうがいいよ)。棒みたいなものが出てくると、それもじつはおちんちんなんじゃないか、と思ったりする。あるいは女の子は、おちんちんのかわりにわれめがついているので、すきまとかわれめとか出てくると、みんな女の子のわれめじゃないかな、と思ったりするんだ。そういうことを考えすぎて頭がおかしくなっちゃって、それで「アリス」をすみからすみまでさがして、棒だの穴だのわれめだのをかぞえてよろこんでる人たちも、ずいぶんいっぱいいるんだ。棒は78本あるんだって。バカだね。

なぜこれが、大人に人気があるのかは、じつはよくわからない。わからないので、それをいっしょうけんめい考えているような、これまたひまな人もたくさんいる。こういう人たちのいうことは、まちがいなしにとってもくだらないので、あまりまじめにきいたりしないほうがいいよ。ひとは、なにかを見ると、ついつい意味を考えちゃうんだ。特にどっかで見たようなものを見かけると、なんか理由があってそれがそこにあったんだろう、とおもってしまう。

たとえば変な夢を見ると、それがときどきずっと気になることがある。その夢に、なんか意味があるような気がすることがある。夢の中で、満員電車のむこうのほうにお父さんがいて、にこにこしてこっちをじっと見ている。でも、そのお父さんには影がない。満員電車なのに、どうして影がないのがわかるんだろう。でもわかる。そしておとうさんはずっとぼくを見ている。ぼくはそんな夢をみたことがある。すると起きてからも考えてしまうんだ。あのときお父さんは、なぜにこにこしていたんだろう、なぜ影がなかったんだろう、と。でも実は、それはぼくが頭の中でこしらえたお父さんの姿で、ほんとのお父さんじゃない。だから「なぜ」なんて理由があるわけがないんだ。でも気になる。

「アリス」もそれと同じだ。ときどきみんなが、ふと考えて、そのままわすれてしまうような変なおもいつきが、ここにはいっぱい入っている。それでぼくたちは、それになんか意味があるように思ってしまう。でも、ほんとはそんな意味はないのかもしれない。そんなものを考えても、しょうがないのかもしれない。そしていろいろ考えて「わかった！」と思っても、ほんとにそれが正しいかどうかはわからない。夢と同じで、あなたがそういうものをかってに頭の中で作っちゃっただけかもしれない。そしてルイス・キャロルはもう死んじゃってるし、だからきくわけにもいかないので、それはいつまでたってもわからないままだ。

ルイス・キャロルも、たぶんわからなかったんだろう。夢をなんとなく見るのと同じで、これもなんとなく書いちゃったんだろうと思う。あるいはときどき、なんだかみょうに調子よくじょうだんをポンポン思いつくことがあるだろう。それと同じで、キャロルも調子がよかっただけなのかもしれない。調子がとってもよかったもんで、このあとルイス・キャロルはこのお話のつづきを書いた。それが『鏡の国のアリス』だ。これは、この『不思議の国のアリス』の3.1415倍くらいへんてこで、不思議で、わけのわからない、でも(いや、だからこそ)おもしろくてすてきなお話なんだ。これはそのうちまたぼくが訳す

けど、時間はこれよりずっとかかるだろう――いやどうかな、ぼくの調子が出たら、あんがいすぐできるかも。

そしてそれにつづいて、キャロルは『スナーク狩り』という詩を書いた。これまたわけのわからないじょうだんだらけの、とってもおもしろい詩だ。このときもキャロルは、まだ調子がよかったんだ。

だけどそのあとでキャロルが書いたのが『シルヴィーとブルーノ』『シルヴィーとブルーノ完結編』というお話だった。ながくて、お説教くさくて、イマイチだ。ところどころ、おもしろい部分もないわけじゃない。でも、この「アリス」みたいなおもしろさはない。キャロルでさえ、自分がなぜこんなおもしろいものが書けたか、わかってなかったんだろう。そして、急に調子が悪くなっちゃったんだろう。それでも、この二つの「アリス」だけで、ルイス・キャロルはたぶんこの先何百年も、わすれられることはないはずだ。

*　　*　　*　　*　　*

*　　*　　*　　*

*　　*　　*　　*　　*

このお話は、もう世界中で読まれていて、まあありとあらゆることばにほんやくされているんだ。日本でもずいぶんむかしからほんやくはある。みじかいし、好きな人もたくさんいるのでまあ、うまいの、へたなの、どうしようもないの、といっぱいある。

ぼくがこれを訳したのは、やっぱり日本で何人目かのアリス訳者になりたかったからだな。いまある訳がそんなに悪いわけじゃない。なかには、アリスをいまの女の子ちっくにしようとしすぎて、がらの悪いスケバン(ふるいね)まがいにしちゃった訳とか、ことばあそびにこだわりすぎて、なんだかとってもわざとらしい、ふしぜんなものにしてしまった訳(柳瀬尚紀の、漢字だらけのおっかないほんやくとかね)もあるけれど、高橋康也の訳とか、矢川澄子の訳とかは、わるくはない。でも、それでもなんだかよどむ。こう、うまく流れないところがある。高橋さんは学者で、矢川さんは詩をかく人だけど、こういう人は自分でいっしょうけんめい考えたりものを書いたりするのがおしごとだ。だから本や紙とばっかりにらめっこをしている。それで、よのなかの人のふつうのしゃべりかたとかは、あんまり知らなかったりする。口にだしたときのひびきと、字に書いて目にみたときの感じとでは、字に書いた方をだいじにしちゃったりする。なーんてことおもって首をかしげてるより、自分で気がすむように訳したほうがはやい。それで訳しちゃった。

それに、この人たちの訳は、コピーしてお友だちにあげたりしてはいけないんだ。おもしろいな、と思って人にメールで送ってもだめ。この人たちは(ぼくもだけれど)自分が書いたものについて、ちょさくけん、というものを持っている。これははたみたいなもので、「これはわたしがオッケーといわないと人にみせたりあげたりしちゃダメですよ」と書いてあるんだ。だからきみたちがこの人たちの文を勝手に人にあげると、この人たちがそのはたをパタパタとふる。するとそれを見て、おまわりさんがくることになっている。こっそりやればたぶんわからないけれど、でもだからといってやっていいわけではない。

じつは、はたを持っているのは書いたり訳したりした人だけじゃない。ふつう、本をつくるときには、いろんな人がいろんなおしごとをする。字がまちがっていないかを確かめる人もいる。イラストをどこにいれようか、とか字の大きさをどのくらいにしようか、とか、決める人もいるし、ひょうしをつくる

人もいる。一番読みやすくてきれいになるように、デザインする人もいるし、印刷する人もいるし、本屋さんまでそれを運ぶ人もいる。その人たちみんなが小さなはたをもっている。

でも、だれかに見せたいな、と思ったとき、いちいち書いた人に「いいですか」ときくのはめんどうくさい。じゅうしょも電話番号もしらないし。それにさいきんでは、みんながはたをふりたがるようになっちゃったもので、いったいだれがはたをもってるのかさえわかんなくなっている。だからぼくは、この文にはそういうはたをつけないことにした。ついでにほかの人も、そういうはたをつけちゃいけないことにした。これでみんな、もっときらくに文がつかえるようになる、はずだ。

それにこの訳は、電子ファイルにもなっているんだ。いままでみたいに紙の本でしか読めないと「三月うさぎはどこにいたかな」と思ってもさがすのがたいへんだ。電子ファイルにしておくと、コンピュータがそういうことをやってくれる。そんなべんりさもあるんだ。

* * * * *

* * * *

* * * * *

どんなにべんりで、じゃまなはたがなくても、訳したものがまちがってたり、へたくそだったりしたらどうしようもない。でもぼくは、いままで日本でほんやくをしてきた人の中では、かなり上手なほうなので、あまり心配しなくていい。なかには、ニンジンがきらいな子がいるのと同じように、ぼくの訳がどうしても好きになれない人もいるし、それよりぼくという人間がきらいな人もいる。でも、そういう人がいっしょうけんめいさがしても、この訳でホントにまちがってるところはなかなかみつからないだろう。ぼくはこのお話をなんども読んで、かなりよく知ってるんだもの。

ただしさっきもいったように、これはもう何度もほんやくされてるお話だ。だからいままでの人たちも、もうずいぶんいろいろくふうをしてきた。だもんで、ぼくがやったからといって、そんなすっごく訳がよくなったりはしていない。いまある訳としても、ぶっちぎりの一番じゃなくて、二ばんとの差はほんのちょっとしかない。

訳すときには、たいした注意はしていないけれど、ただなるべくアリスの話かたを自然にしようとした。これまでの訳だと、アリスは自分でぶつぶつ言っているときにも、かなりよそゆきのことばをしゃべったりしてる。それってへんだろう。アリスはずいぶんむかしの女の子だから、たしかにちょっと古いしゃべりかたをしているけれど、でもそこ頃の人たちとしてはごくふつうにしゃべってたはず。そのふつうなところをちゃんと出したいな、と思ったわけだ。

とはいえ、これはちょっとむずかしい。このお話で、アリスは6つくらいだろうけれど、でもじつは最近の日本の高校生でも知らないようなことをたくさん知っている。たとえば最初のところでうさぎの穴を落ちながら、アリスは地球のまん中までどのくらいあるかを、すぐにおもいだせる。あるいはフランス語もちょっとしゃべれちゃったりする。すごいね。むかしの人はいっぱい勉強したんだ。だからふつうに訳すと、すごくものしりな高校生もどきがしゃべってるみたいに聞こえちゃうんだ。そこはなんとかくふうして、小学校5年生くらいの口ぶりにはしたつもりだけれど、それでもかなりませた感じになる。でも、これでせいいっぱいなのでゆるしてね。

そしてそれ以外のところも、だれかが女の子に読んできかせている、という感じをだいじにしようと

している。ふつう、こういうのを読んであげるときは、ふつうに読みながら、ちょっとむずかしいところや説明なんかを、ちょっと口ぶりを変えてはさんだりする。文中でかっこ()に入っているのがそういうところだ。そういうところで口ぶりを変える感じもだそうとした。

で、それはうまくいってるかな？　ぼくはわれながら、なかなかじょうずにできたと思っているけれど、それはみんなが自分で読んできめてほしい。「こうしたほうがいいよ」と思ったら、それをぼくに教えてくれてもいいし、あるいはこの文をもとにして、自分流の訳をつくったり（そのときは、ぼくのをもとにしてるってことは書いておくようにね）、それともこんな訳なんか完全にうっちゃって、まっさらな訳を自分でやってみたりする人が、もっともっと出てくるといいな。

*　*　*　*　*

*　*　*　*

*　*　*　*　*

みじかくすませるつもりが、えらく長くなってしまいました。では、次の『鏡の国のアリス』でまたお目にかかろう。じゃあね。

1999 年 11 月
アリスがおちていった先のオーストラリアにて
山形浩生（hiyori13@alum.mit.edu）

目次にもどる

プロジェクト杉田玄白トップ　山形浩生トップ

YAMAGATA Hiroo<hiyori13@alum.mit.edu>



